

Prism of Ophelia

キャラクター：

オフェリア： (Ophelia, ヒロイン)

盲目のエルフ神官。

生まれた時から既に盲目で、実親は行方不明のため、孤児。族長のノエルに拾われて、養子として育てられた。

元々エルフは凄まじい感知力を持つ種族であり、オフェリアは視覚を無くした代わりに、感知力がエルフの中でも随一。

目の包帯では隠せないほどの可憐な容姿と、神官に相応しい穏やかで柔らかい口調。見えないからこそ表象に惑わされず、本質を見透かす聰明さがあり、正しい神官そのものを代表するオフェリアはエルフ達から信頼されている。自分が決めたことにやや頑固なのはご愛嬌。

目に関しては少しコンプレックスを持っている。目隠しを取ることはほぼない。

「あなたを救った理由……ですか。

簡単ですよ、守りたいからです。

アルフヘイムも、エルフの子供達も、あなたも。」

聞き手： (ヒーロー)

生身の人間、名前はハムレットではない。

人間の国ヴァルガードでは数少ない魔法適性のある魔導科学研究者。

孤児で、修道院のシスターの元で育った。

一見研究者らしい知的で物静かなタイプだが、実際はかなり好奇心が強く、時には思いもよらぬ大胆な行動を起こす隠れ熱血漢。

ある日、とある実験により、間違えてアルフヘイムに転送されてしまう。その際重傷を負って、オフェリアに救助された。

彼女に一目ぼれ。

「オフェリアさん、僕はあなたの目になりますよ。」

ノエル： (Noel)

エルフ一族の現族長、アルフヘイムの女王にあたる。魔法能力ならエルフの中ではダントツに高いうえ、発明家。アルフヘイム魔法結界の開発者であり、管理者。

凄まじい能力の持ち主だが、天才肌であるとともに気難しくもある。疑い深い。

オフェリアの育ての親であり、魔法を教えた師匠でもある。オフェリアに厳しい教育を行ったが、やはり彼女には優しく、面倒をよく見ている。

独身主義者だが、最近は「そろそろ自分も家庭を築きたい」と思っている。本人はそれを認めていない。

「ほっとけ！性格が悪いことくらい妾だって知ってるわ！」

クレア：(Claire)

エルフ一族の前族長。子を授かったため退任した。

夫と第二子のフローラと一緒にアルフヘイム最大の集落リヴェンダルに住んでいる。

普段はのほほんとしたおばさんだが、実際は今でもアルフヘイム最強戦力の一人。特にステルスと風魔法が得意。

ノエルとは長い付き合いの親友で、よく一緒に飲む仲。

「もし泣かせたら……そうね、とりあえず、この前アルフヘイム族長の実力を、その身で味わうことになるわよ。」

ブレッタ：(Bretta)

ヴァルガード魔導研究所の研究員。主人公の助手。

真面目で口数は少ないが、主人公に対してどこか毒舌気味。

研究で数々の無茶なアイデアを繰り出す主人公のブレーキ役。

「先生、まだ寝ぼけているんですか？ブレッタですよ。」

専門用語：

アルフヘイム：(Alfheim)

ほかの種族と関わらないようにするため魔法結界で隔離された、森に構築されているエルフたちの国。

魔法結界は探知・防御用だけでなく、オブラーントのように森を包み込み、その内で位相変換を行い、現実と異なる空間を作り出す。

管理者の許可がなければアルフヘイムへの物理干渉は不可能で、普通の魔法も通じない。エルフ族を完全に匿うことができる。

ヴァルガード：(Valgard)

人間の国。ドワーフと比べるほどではないが、科学はそれなりに発展している。

第二次産業革命は三十年前だが、今でも様々な発明がされている。

しかし、殆どの人間は魔法を使わないため、魔法に関しては圧倒的に実力不足。

エーテル：(Ether)

魔法を使う時消耗するエネルギー。「魔力の源」とも言われる。世界のどこにでも存在しているが、使用できるのは限られた種族のみ（代表例はエルフ、ピクシーなど）。他の種族にも魔法を使える個体はあるが、極稀のケースである。

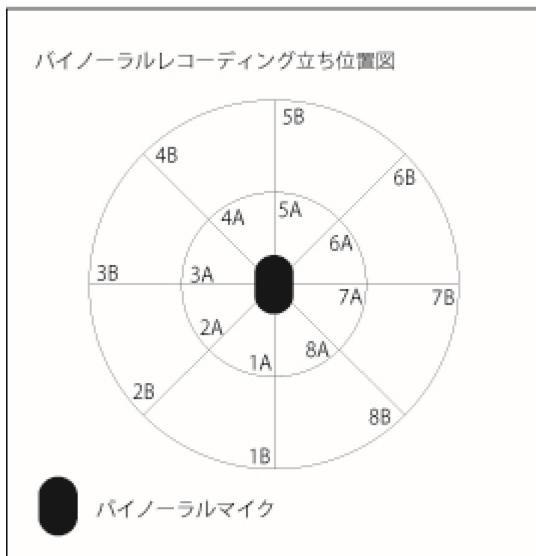
最近、「魔導科学」という魔法と科学を融合した学問が、魔法を使えない種族によって重点的に研究されている。エーテルを自然エネルギーのように自由に、高効率的に使うのが目標。

台本説明 :

1、()、【】と《》の中の内容は指示と補足、それ以外のすべてはセリフとなります。

- 【】は複数のキャラクターが同時に登場する場合のみキャラクターの指示として使われています。トラック冒頭で登場人物とトラック内容を書いていますので、そちらをご参照ください。
- 《》の中は位置、距離、声の大きさの指示となります。次の指示が出るまで、前の指示に従ってください。
- ()の中はシーンに関する補足となります、基本的に以下三種類：
 - セリフの前の演技指示（ト書き）。キャラクターの口調、感情など。
 - 演出とアンビエントの説明。主に編集の時使われています。
 - 場面転換と場所の説明。カット割りやシーン冒頭の説明など。

2、位置の指示は六種類となります：



5A/5B を正面にして：

- 左側：3A/3B
- やや左：4A/4B
- 正面：5A/5B
- やや右：6A/6B
- 右側：7A/7B
- 後ろ：1A/1B

具体的な距離は距離指示にご参照ください。

3、距離の指示は四段階となります：

- 直近距離：0—5 cm。耳元（横から）、おでこツン（正面から）の距離。
- やや近い：5—15 cm。膝枕や耳打ちなどの距離。
- 通常距離：15—25 cm。普通の会話距離。
- やや遠い：25—40 cm。正常より遠く感じる。

センチ数はあくまでも目安ですので、ご参考までにお目通しください。

4、声の大きさの指示は四段階となります：

- **囁き**：囁き声。
- **小さい声**：耳打ちや独り言をする時の音量となります。
- **通常音量**：普通の会話音量。
- **やや大きい声**：呼びかける時、気持ちが昂る時の音量となります。

以下は台本本文。

台本：

ACT 1

1、予期せぬ来訪者

||||登場人物：オフェリア、ノエル

||||トラック内容：人間がアルフヘイムに現れて、その人間の処置についての議論

○Scene 1：ノエル自宅

(シーン：ノエル自宅、オフェリアがノエルに状況の報告をしている)

(アンビエント：ノエル自宅、色々な設備があつて研究室っぽく)

(演出：机を叩く、バン！)

【ノエル】

《やや左、通常距離、やや大きい声》

(かなり強い口調)

なっ！？人間が結界を越えて、アルフヘイムに現れたじやと！？

妾の術式にまだ破綻があるというのか！？

【オフェリア】

《やや右、通常距離、通常音量》

落ち着いてくださいノエル様！

もし結界の破綻が原因だとすれば、私の探知も利かないはず。結界は大丈夫ですよ。

これまでに捜索隊から報告された情報をまとめて送りました。

私から見ればこの人は……「意図的にトンネルを作つてこちらに潜入した」わけではありません。

どちらかというと、「高速で壁にぶつかり、こちらに弾かれた」という方が近いです。

侵入にしては、あまりにも無茶な方法だと思います。

【ノエル】

《通常音量》

(資料を読む、少し落ち着いている) ふむ……

妾が知っている限り、人間という種族は妾達エルフと同じ土俵に立っているはず。自分たちを守ることに手一杯で、他の種族に喧嘩を売るほどの余力などない……

《独り言、小さい声》

だとすれば……本当に事故か？

しかし微妙じゃな……どんな事故で、妾の結界まで飛び越えて……

結界の基礎は位相魔法じゃが……まさかな……

ただでさえ人間の魔法使いは少ないというのに、いきなりそのような複雑な術式を研究するか……？

いや、その前に研究するための知識があるのか……？

【オフェリア】

そこに関しては、この人間、魔法は使えそうですよ。

【ノエル】

《通常音量》

(眉を上げる) ほおー？ これはまたまた面白いやつじゃのう。

【オフェリア】

しかし、私から見れば、魔力源、つまりエーテルの吸収量はエルフの子供に相当。

このような高位魔法、たとえ術式の編成方法がわかったとしても、自力で実験するのはまず不可能ですね。

(演出：通信アラーム)

あっ、すみませんノエル様、捜索隊からの通信です。

こちらオフェリアです、聴こえています。

(驚く) えっ！？ そんなに酷いのですか！？ はい……はい、わかりました。

ノエル様、その人間は瀕死状態で、捜索隊が既に応急手当をしましたが、まだ目覚めていないようです。それと、完治まではかなり長い時間が掛かるそうです。

【ノエル】

そうか……まだ目覚めていないか。それならおそらくアルフヘイムに関しての記憶はないはずじや。

別にこの人間に恨みがあるわけではないが、アルフヘイムの安全の為に、今のうちにここから放り出すしかないのう……

【オフェリア】

(慌てて) す、少し待ってください！

アルフヘイムの転移範囲内には荒野しかありません。それに魔獣だらけで、普通の人間にとつてもかなり危険な地域のはずです。こんな状態で放り出したら、間違いなく餌食になりますよ！

【ノエル】

言いたいことはわかる。この人間には、妾も申し訳ないと思っておる……

しかし追放しないのならば、このままこやつをアルフヘイムに留まらせるのか？

【オフェリア】

少なくとも、この人が目覚めてから——

【ノエル】

(強い口調)

ならん。今更異邦人と関係を持ってどうする。外との繋がりを断つために、妾がどれだけの心血を費やして今の結界を張ったと思っておる。

こやつが事故の被害者じやろうが本物の間者じやろうが、アルフヘイムに関しての記憶がない以上、我々に危険はない。

(普通口調に戻る)

お前の気持ちはわかるが、エルフの安全に関することに一切議論の余地はない。お前が一番わかつておるはずじや、オフェリア。

【オフェリア】

《やや大きい声》

(強い口調)

しかし！原因はどうあれ、この人は瀕死の状態でここにいます！

まさか、なにもしないまま、都合よく目を閉じて、「この人は運が悪かったから仕方がない」と仰るのですか！？

私達エルフは、自然と命を大事にする種族であると、あなたが教えてくださったのですよ！？

【ノエル】

《やや大きい声》

(強い口調)

それくらい妾もわかつておる！しかし現実はそんな綺麗なものではないぞ！

アルフヘイムを守らないとエルフもいなくなる。命を守りたいのなら、まず自分の命を大切にしろと何度も言ったはずじゃぞ！

【オフェリア】

《通常音量》

(普通口調に戻る)

……つまり、ノエル様が反対するのは、この方がアルフヘイムの情報を外に漏らす可能性があるからですよね？

【ノエル】

《通常音量》

(普通口調に戻る)

もちろんじゃ。

【オフェリア】

なら、そのことを「なかったこと」にすればいいでしょう？

【ノエル】

……どういう意味じや？

【オフェリア】

この人がアルフヘイムにいる間は、ノエル様の許可がない以上、外へのいかなる通信手段も切れているはずです。ならば、後で、この人の記憶を消せばいい話です。

つまり、記憶を無くして、アルフヘイムに関する情報を外に漏らさないようにすれば、問題はないと思います。

この人の面倒は、私が見ます。もし怪しい行動があったら、すぐに報告いたします。
それとも、まだ他に心配なことがありますか？

【ノエル】

(長い溜息) はあー、記憶操作かー……よくそんな面倒なことを思いつくなお前は。
まったく……少しだけ、考えさせてくれ。

《左から右、右から左、歩き回りながら、通常距離》

《独り言、小さい声》

ふうー、まず状況を整理しようかのう……

相手は人間、魔法が使えるとはいえる程度、強引に結界を破る可能性はほぼゼロ
……万が一破ってもオフェリアがすぐ見つけるはず……

再び転移魔法を使う可能性は……今のところはないが、念のため身の回り品も調査しよう。
結局肝心なのは記憶消去か……確かに面倒くさいが、一人だけなら……

《やや左、通常距離、通常音量》

(ため息) はあ……お手上げじや。

いいじやろう、お前がここまでこの人間を救いたいのなら、救っても構わん。ただし、一つ条件がある。記憶操作は妾が直々にやる、強制的にじや。消されたくないのなら死ぬまで二度とアルフヘイムから離れられんことになる。異存はあるか？

【オフェリア】

わかりました。異存ありません。

【ノエル】

ならよい、好きにしろ。

あと、念のため、この人間の身に附いているものは全部没収する。こやつに関してもう少し調べ上げるぞ。

しかし、今日は一体どうしたのじやオフェリア。ここまで身を挺して、そんなにこの人間を救いたいのか？

まあ、一つ忠告しておく。異邦人である以上、親しくならない方がいいぞ。
お前自身のためにもな。

【オフェリア】

……善処します。

それでは、捜査隊の様子を見に行きますので、お先に失礼いたします。

【ノエル】

ああ、頼むぞ。

(キャラクター：オフェリア退場)

2、異邦人

||||登場人物：オフェリア、ノエル、主人公

||||トラック内容：主人公が目を覚まし、オフェリアとノエルが主人公に現状を教える、リンクちゃん編成練習

○Scene 2：オフェリア自宅・午後

(シーン：オフェリア自宅二階の寝室、主人公がベッドで寝ている、オフェリアはベッドの隣に座っている)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント)

(演出：主人公が目覚める、布団のもぞもぞの音)

【オフェリア】

《正面、通常距離、通常音量》

っ！目が覚めましたか？

(演出：主人公が起き上がるをする)

あっ！少しお待ちください、急に動いてはなりませんよ。かなり酷い傷を負ってましたから。私が手伝いますので、そのままゆっくり起き上がってください……

(演出：布団のもぞもぞ音)

はい、水です。焦らずに飲んでください。

(演出：水を飲む音)

おかわりはいかがですか？

あれ？どうしました？喉に手を当てて。

……もしかして、声が出ない、ですか？

当たりのようですね。

少しの間、じっとしててください。ちょっとだけ、診察いたします。

(演出：オフェリア魔法展開)

……原因はわかりました。

すこし長くなるかもしれません、この件を含めて、あなたの今の状況を説明いたしましょう。

あなたは今、私達エルフが住んでいる国、アルフヘイムに居ます。多分既にご存知だと思いますが、アルフヘイムは今、外との交流を一切遮断し、国境ごと結界によって閉鎖しています。しかし、昨日あなたがここに現れた時には既に致命傷を負っていましたので、まず治療を優先して、ここに運びました。

あっ、申し遅れました。私、オフェリアといいます。

格好でもうお分かりかと思いますが、エルフ一族の神官を務めています。

ご覧の通り、目は見えませんが、一応、「探知力」というものがあります。基本的な生活については問題ありません。ですので、もしなにか必要でしたら遠慮なくお申しつけくださいね。

私のことは後にしましょう。まずあなたの体の状態を説明いたします。

簡潔に言えば、外傷はほぼ全部癒合しましたが、身体が元の状態に戻るまでかなりの時間がかかります。

さっき、声をあげようとしましたよね？声が出せない原因は、声帯がまだ完治していないから。

実を言いますと、あなたの身体中の殆どの器官に、長い休息が必要なんです。体自身の治癒力に頼ればいずれ完治できますが、その期間が人間にとっては長く、下手したら十年以上も掛かります。もちろん、もし治療魔法を定期的に受けければ、2ヶ月くらいで元通りになります。とはいえ、今は命に係わる危険はありませんし、日常生活に支障は出ないと思います。今すぐ帰りたいと仰るのなら構いませんけど……

厄介なのは、アルフヘイムの結界の外の魔獣です。元々なかなか手強い相手ですので、今のあなたの状態じゃさらに危険なんですね……

だから、一番安全な選択は、ここで治療を受け、完治してから帰ることです。

もっと簡単に説明すると、あなたにはこれから2ヶ月の間、ここに留まってもらうことをお勧めします。

ここまで話は、おわかりいただけましたか？

首を縦に振っているということは、大丈夫みたいですね。

それでは続けます。

言い難いことですが、お帰りになる際には、アルフヘイムの安全のため、ここに関する記憶を全部消去させていただきます。

記憶操作なんて横暴だと百も承知ですが、その点についてはどうかお許しを。

安全性なら、私が——

(キャラクター：ノエル登場、オフェリアの話を遮る)

(演出：ドア開く)

【ノエル】

《やや左、通常距離、通常音量》

心配はいらん、記憶の消去は、妾が直々にやる。安心しろ、人間よ。

【オフェリア】

《やや右、通常距離》

あっ、ノエル様……

紹介が遅くなりました。こちらは、我々エルフ一族の長であるノエル様です。

魔法に関してノエル様より博識のエルフはありません。

(演出：足音)

【ノエル】

《正面、やや近い》

小僧、人間のお前がどうして遠路はるばるアルフヘイムまでやって来たのか、今日は問わずにおこう。情報を得るために間者じやろうが、自分の理解範囲を超えた魔法を弄ったただの馬鹿じやろうが、許可なしにこの国に侵入したことは変わらん。

お前ら人間と我が一族は昔から接点が少ない。敵ではあるまいが、少なくとも友とは言い切れない。元々、お前の応急手当をしたらここから放り出すつもりじゃったが、うちの神官さんにでかい文句を叩かれてのう。彼女の顔を立てて、お前を暫くの間ここに置いても構わん。

しかし、今お前の存在がアルフヘイムにとって不安定要因の一つであるというのも事実。

よって、お前がここから離れる時、この場所に関するすべての記憶を消去させてもらうぞ。

これが一族の長としての最大限の譲歩じや。

安全性なら、妾が直に保証する。信用できないなら今すぐにでも証明するが……

(主人公が慌てて首を横に振る)

ふふ、いらないようじやな。

もちろん、ここから出ないのならば、消去する必要はない。どうするかは、お前次第じや。

ああ、それと、ここに来た時は丸腰のようじやったが、お前ら人間はいつも妙な小細工が好きじやから、服も含めて身の周りのものは暫く妾のところで保管する。案ずるな、帰る時にきちんと返す。

最後に念のため言っておくが、外に連絡するのは諦めろ。妾が許可した以外の外への魔術通信は不可能じや。もちろん物理的にも無駄じやぞ、鳩すらここから出られぬ。

他のことは、オフェリアに従えばよい。感謝の言葉も彼女に言え。

まあ顔を見た限り元気そうじやから、ひとまず一安心じやな、オフェリア？

妾からは以上じや、それじやあの。

(キャラクター：ノエル退場)

(演出：足音、ドア閉め)

【オフェリア】

《正面、やや遠い、小さい声》

(ドアの方に向かって) ……もう、本当にいつも突然やってきて。事前に言ってくださればいいのに……。

《正面、通常距離》

(主人公に向かって) 申し訳ありません、ノエル様はいつもあんな話し方で、脅かすように聞こえたかもしれません、根はとってもいい方です。気になさらないでください。

あれ？どうかされましたか……？

(突然思い出したように) ああそうでした！声が出ないからどう交流すればいいかわからないですよね……すみません、私そんな大事なことを……

しかし、どうすればいいでしょうか……筆と紙だと、流石に不便ですね……

あっ、確か、人間さんは魔法使えるんでしたよね？今、試しに使ってみてください！

(演出：主人公魔法展開)

良かった！これで簡単な術式は編成できます！

それでは、これから私が行う術式編成に集中してください。

では、始めていきます。

(演出：オフェリア魔法展開)

はい、完成しました。今編成したこの術式を再現してみてください、基本術式だけで編み出した簡単なものですので、魔法に疎くても真似できると思いますが……

(演出：主人公魔法展開、失敗)

あ、あははー、編成のペースが早く見えなかつたですよね……

申し訳ありません、エルフの子供以外に魔法を教えるのは初めてで……

それでは、もう一度編成しますね。次は見やすいようにゆっくりやります。準備はよろしいですか？

はい、それでは始めます。

(演出：オフェリア魔法展開)

完成しました。出来る限り遅めに編成しましたが、これで大丈夫でしょうか？では、もう一回試してみてください！

(主人公魔法展開、遅め)

あっ、ちゃんとできましたね！すごいです！

やっぱり所々手癖はありますけど、とっても緻密な編み方……お上手です！

それでは、この魔法に関して説明いたしましょう。

これは全アルフヘイムで応用できる通信魔法「マインドリンク」の基本形、通称「リンクちゃん」です！

短い手紙を書くような感じで内容を書き込めば、直接その相手と通信が出来ます。

えっと、外の世界でいうところの……「テレパシー」みたいなものですね。

例えば、私からこうやって言葉を書き込み、送り出すと……

(演出：リバーブ)

「おはよう、人間さん。」

ふふ、驚いた顔をしていますね。どうやら届いたみたいですね！次は、あなたから私に送ってみてください！

……届きました！「こんにちは、オフェリアさん」って書いてあります。間違いありませんか？

大丈夫みたいですね。これでリンクちゃんを通じて交流できます！

私達がさっき編成したリンクちゃんは特製のもので、あなたと私の間でだけ有効なんです。遠慮なくお使いくださいね！

もちろん意識がはっきりしていない時、例えば寝てる時や、通信そのものを拒否している状態だと通信できません。

早速リンクちゃんから……あら、今回は長めみたいですね、えっと……

あっ、名前書いてあります。

普段聞き慣れた名前とちょっと違って、なんだか新鮮です、ふふ。

いい響きで素敵だと思いますよ！

(主人公から送られたメッセージを読みあげる) 「人間の国、ヴァルガードの魔法研究者」
……ですか。道理で魔法を使えるわけです。

種族的に人間の魔法使いはかなり少ないと聞いていましたが……やっぱり同僚がほとんどいないと大変そうですね。

「魔法の実験をした時、術式に破綻があって、巻き込まれました」……

やはりそうですか……

いえ、傷の特徴を見たら、恐らく魔法関連のものが原因だらうと推察できましたので……
運良く間違えた変換先はアルフヘイムの近くで、虚空間があなたをここに弾いた可能性が高い
ですね。

あっ、わからなくても大丈夫ですよ。魔法の話は後にして、今は回復に専念した方がいいで
す。

つづきは……

(主人公からの通信を読み上げる)

「これ以上のことは機密事項で言えません。実際、一刻も早くヴァルガードへ帰らねばなりませんが、話によると、選択肢はそこまで多くないようですね。これから二ヶ月間、何卒よろしくお願ひいたします。アルフヘイムの情報に疎くて申し訳ありませんが、無関係な記憶さえ抹消されなければ、族長の仰った通りで問題ありません。改めて、僕を救って下さったこと、治療を施してくださること、心から感謝します。ありがとうございます、オフェリアさん。」

こんなにも早く状況を呑み込めるなんて、すごい人ですね……
こちらこそ、申し訳ありませんでした。
目覚めたばかりでまだ混乱しているでしょうに、こちらがせわしなくて。
事故でここに来たあなたにとっては、私達も素性不明な種族ですよね。
なにせこの数十年、ずっとここに閉じ込もっていましたから。

でも、二つ保証します。
一つは、あなたはここにいる限り、絶対安全だということです。もう一つは、アルフヘイムにいるエルフは皆、争いを望みません。
私達は、自然と命を大事にする種族で、それが誇りだと思って生きています。むしろ、戦いをしたくないからこそ、隠れているのです。

(短い沈黙)

《正面、通常距離、通常音量》
あっ、話をしているうちにもう随分遅くなりましたね！そろそろ晩ご飯を準備しないと。
あなたにも、ちょっと静かな時間が必要ですよね。
私、下のキッチンにいますので、ご用があれば、いつでもリンクちゃんでお呼びください。

あと、もう少し時間が経てば、筋肉の力は戻るはずです。
できれば、部屋の中を歩き回ってください、その方が回復は早いです。
それでは、私はお先に——

【主人公】あのーオフェリアさん、一つ伺ってもよろしいでしょうか？

あっ、はい、質問ですか？なんでしょう？

【主人公】僕が今着ている服は……えっと、明らかに女性用の寝着なんですが……

ふ、服ですか……
えっと一……ノエル様の言う通り、あなたの身の回りのものは全部没収してしまいましたので……

【主人公】服もですか！？

はい、服もです……
今着ているのは……わ、私の寝着なんです……他の服、サイズが小さかったので……
で、でもご安心ください！それは昨日洗濯したばかりですから！
(恥ずかしく) 臭いはない……はず……です……

【主人公】そ、そうですか……じゃあ着替えもオフェリアさんが……

うえ！？着替え！？

(更に恥ずかしく)は、はい……あなたを着替えさせたのも私です……村にいる男性のエルフは皆見廻りに行っていましたので……

それに私はほら、まともに「見えません」から……

とはいえ、あのー、お体を触るのは仕方なかったので……

も、もしご不快でしたら申し訳ありません……うう……

【主人公】いえいえこちらこそ、何から何まで。お礼としてなにかやらせてください！

いえいえ、そんな、お礼なんて！あなたの面倒は私が見ることになってますので、これくらい大丈夫ですよ！

【主人公】ならせめて、僕を救ってくださったお礼を……

「自分を救ったお礼」、ですか……

ふふ、もし本当にお礼をしてくださるなら、今日の晩御飯の味試しを手伝ってください。
人間の口に合うかどうかわかりませんので、ふふ～

3、リヴェンダル見聞録

||||登場人物：オフェリア、クレア、ノエル、主人公

||||トラック内容：オフェリアと主人公がリヴェンダルへ、クレアとの遭遇

○Scene 3：オフェリア自宅

(シーン：オフェリア自宅、キッチン)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント)

(演出：食器を洗う音)

【オフェリア】

《正面、通常距離、通常音量》

(満足そうに) はあーまさか、人間の料理を味わう日がくるなんてー

あっ、お片付け、手伝います！

(演出：食器洗い)

《右、やや近い》

あれからもう一週間くらい経ちましたね。こちらでの生活は慣れましたか？

【主人公】 「慣れた」 うんぬん以前に、なにもしていない気がするけど……

ふふ、確かに、生活といつても、毎日近くに散歩しに行くくらいですよね。

でも、予想より回復がずっと早くて良かったです。

もうお料理を作れるくらいですし。

【主人公】 こちらこそ、毎日オフェリアさんに頼ってばかりで恥ずかしいですよ……

もう、「頼ってばかり」だなんて水臭いですよ。

あなたの面倒は私が見てるんですから、そもそもご飯を作っていただけるだけで十分です。

それに私はアルフヘイム以外のところに行ったことがないので、ずっと異国の料理を試してみたかったです。だから、今日は本当にありがとうございます！

【主人公】 料理とは少々大袈裟かもしれませんね。僕は料理人ではありませんので、普通のものしかできませんよ。

いえいえそんなご謙遜なさらずに。とても美味しかったですよ！

私としては、高級料理より「普通のもの」の方がいいです！
異文化を学ぶには、その文化にありふれたものを体験するのが一番だと思います。

もし機会があったら、いつか人間の国に行きたいですが……
(ちょっと暗く) 今のアルフヘイムじゃ叶わないかもしれません……

(正常に戻る) そういえば、新調した服、体に合いますか？
大丈夫？なら良かったです。

【主人公】これ、エルフの普段着みたいなものですか？

はい、普通の男性エルフのみんなが着てる服ですよ。
比べたら、確かに人間の服よりかなり軽いですね、素材の違いでしょうか。
でも、軽い分、動きやすいですし私は好きです。

(カット割り：時間経ち)

これで後片付け全部終わりましたね！

《正面、通常距離、通常音量》

さて、今日はどうしましょうか？このあと私はリヴェンダルに行く予定ですが……
あっ、リヴェンダルはエルフの集落の一つで、私も普段、あちらの方で仕事しています。今日はあなたの治療用の薬を交換する為に。

【主人公】本当に、なにからなにまで……

いえいえ、大丈夫です、薬自体はそこまで珍しいものではありませんよ。丁度、手元にあったものが切れただけですので。

一緒に行きたい……ですか？

いいえ、そのこと 자체は問題ありませんけど、少し離れているので、体力の方は大丈夫かと。

引きこもりすぎて運動したい……ふふ、わかりました。では一緒に行きましょうか。
でも、もし疲れたら、強がらずにすぐに言ってくださいね。

○Scene 4：リヴェンダル道中

(シーン：森の中、オフェリアと主人公が歩いている)
(アンビエント：普通の森の中のアンビエント)

(演出：二人の足音)

【オフェリア】

《やや右、通常距離、通常音量》

今日は天気がいいですね。そこまで暑くありませんし、風が吹いてて気持ちいいです
でも、この様子じやあ……近々雨が降るかもしれませんね。

【主人公】天気もわかるのですか！？

ふふ、私達エルフの予報はそこそこ当たるものですよ？

「風が泣いている」とは少々過大な表現ですけど、空気で感じる湿度やエーテルの流れで何となくわかります。

私は皆さんより少し感知能力が高いですので、ちょっと遠いところの状況も大体わかりますよ。

どれくらい遠くまでかというと……えっと、二十キロあたり、でしょうか。

【主人公】えっ！？探知機並みじゃないですか！？

「たんちき」……？「たんちき」とは、一体なんでしょうか？

でん、ぱ……？聞いたことのないものばっかりです。

これが「科学」というものですよね？

私達エルフは、魔法以外には疎いので、かなり新鮮です。

【主人公】そういうえばオフェリアさん。

はい、なんでしょう。

【主人公】私達、さっきからずっと森の中を歩いてるような気がするけど……

ふふ、確かに、ずっと森の中を歩いてますね。

ちょっと尋ねたいことがあるんですが、人間の国では、アルフヘイムについてどれくらい知
られているのでしょうか？

【主人公】どの程度かといつても、エルフという種族が住んでいる場所で、でも今は封鎖され
ていて誰も入れない、くらいですね……爺ちゃん婆ちゃんの世代の冒険者はエルフと接触した
人がいたみたいですが、結局ただの噂話で真偽は不明ですね。

やっぱり、「エルフの母国」であることくらいしか知られてませんでしたか。
元々ここから外へ出ることも少ないので、仕方ありませんね。

結界がまだなかった時は、行商人のエルフもいましたけど、活動範囲の殆どは近隣の国で、ヴァルガードくらい遠くの国まで足を運んだエルフはそうそういません。

では、この土地について簡単に説明しましょうか。

(説明っぽく) アルフヘイムは、「アルフヘイムの森」を主体にした地域と、この地を治めるエルフの国を指しています。

森は国全体の九割以上で、エルフは先祖代々、ずっとここに住んでいました。

人間ほど社会的ではありませんが、エルフにはいくつの集落があります。殆どは森の奥にありますので、結界無しでも、そう簡単には辿り着けませんね。

私達が向かうリヴェンダルは、その中の一番大きい集落ですよ。

【主人公】なるほど……要するに国ごと森の中にあるわけですね。森はどれくらい広いんですか？

はい、アルフヘイムは、森だけの国と言っても過言ではありません。どれくらい広いのかというと……標準単位に換算すると、三、四百平方キロですね。

【主人公】あれ？予想より広くはありませんね。

確かに、単純に数字で見ると小さいかもしれません、エルフ種族自体は数千人しかいませんから。それに、魔法は得意な方なので、自給自足するなら十分すぎるくらいの土地です。だから、元から外の国との交流は薄かったです。

あっ、もうすぐきますよ。
あの高い木の上、建物らしいものが見えるでしょう？
あれは、ノエル様のお家ですよ。

【主人公】えっ……

ふふ、心配しないでください、自力で木を登る必要はありませんよ。
それでは、参りましょうか。

○Scene 5：リヴェンダル・入口

(アンビエント：のどかな村)

【オフェリア】

《正面、通常距離、通常音量》

つきました！ようこそ、アルフヘイム最大の集落、リヴェンダルへ！体の調子は大丈夫ですか？

あら、体力が回復しつつあるみたいですね、いいことです。

では、紹介を兼ねて、少し集落をまわりましょうか。まずはここ、リヴェンダルの入口です。

(演出：二人の足音)

《やや左、通常距離、通常音量》

今私達が居るこの小さな広場は、昔、市場として使われていました。

稀にですが、外からの異種族の商人さん達がここで店を開いていたこともあります。

外との連絡がなくなった今は、子供たちの遊び場になってしまいしたけどね。

【主人公】エルフにはお店などはないのですか？

エルフのお店……ですか……

さっき言った通り、アルフヘイムは自給自足できますし、私達は元から必要以外のものにそこまで執着しませんので、「市場」という体制が必要ありません。

実際、今のアルフヘイムには「お金」すら存在しませんね。そのかわり、各集落には「交換所」があります。余ったものがあれば、そちらに預けます。逆に、もしなにか必要になれば、交換所に預けた物を取り出す、或いはその場で必要な物と交換するという形になります。私個人としては、またガヤガヤした市場を体験したいですけどね、ふふ。

【主人公】なるほど……これもある種の計画経済か……

次は……そうですね、ノエル様のお家に行く前に、もっと深いところに行きましょう？

【主人公】よろしくお願ひいたします！

○Scene 6：リヴェンダル・住宅区

(アンビエント：のどかな村)

【オフェリア】

《やや左、通常距離、通常音量》

(説明っぽく) この辺りは、住宅区となります。私みたいに独身のエルフは外に住んでいますけど、子を持ち、家庭を築いた方は、殆ど集落の中で暮らしています。

【主人公】全部、ツリーハウスですね……

はい、ノエル様のお家ほど高くはありませんが、全部木の上に建てられています。元から木の上に住む種族なので、私の家みたいに地面に建てられた家は逆に少ないんですよ。

(演出：足音)

(キャラクター：クレア登場)

【クレア】

《後ろ、やや遠い距離、通常音量》

あら、オフェリアちゃんじゃない、お久しぶりー

【オフェリア】

あっ、クレアさん、お久しぶりですね。ご主人とフローラちゃんはお元気ですか？

【クレア】

《正面、通常距離、通常音量》

おかげさまで家族全員が元気ですよ、いつもありがとうございます。

フローラはむしろ元気すぎて困るくらいよ。この前、「族長の教え方が下手」なんて言って、またオフェリアちゃんから魔法を学びたがってたわ。

それよりオフェリアちゃん、こちらはまさか……？

【オフェリア】

はい、「噂の」人間さんです。

今日はリヴェンダルを見に行きたいと仰ったので、連れてきました。

【クレア】

うーん……好奇心旺盛っていうのは合ってるけど、印象と全然違うのねー

ほら、あれほど派手な登場をしたから、てっきりもっとワイルドな人だと思ってたよ。わりと優しい顔してるね。

(からかう) あっ、ひょっとして、オフェリアちゃんはこういうのがタイプなの？

【オフェリア】

(恥ずかしそうに) タイプって……ち、違いますよ！

【クレア】

(からかう) でも、ノエルから聞いたよ。珍しく強引に、この人をここに留ませたって。まさかの一目惚れ？

【オフェリア】

(慌てて) クレアさん！本当に違いますよ、私はただ——

【クレア】

(優しい声で) あのまま見過ごせなかつたんでしょう？ふふ、オフェリアちゃんがオフェリアちゃんでよかった。私は好きよ、貴女のそういうところ。
誰も救わないのなら、最後は自分を救うことも出来なくなるしね。

本当、あのノエルが一体どうやって貴女をこんないい子に育てたのかわからないわー

って、こんなおばさんの話を聞いても時間の無駄よね。
そうそう人間さん、ちょっとお耳を借りてもいいかしら？

(演出：足音)

《左、直近距離、やや近い》

(耳打ち) 一つ、忠告をしておくわね。

オフェリアちゃん、男女の関係に関してはちょーっと鈍いかもしれないけど、一緒に住んでいるからってよからぬことを考えちゃダメよ？

もし泣かせたら……そうね、とりあえず、

(ここで口調がガラッと変わって威圧感を出す) この前アルフヘイム族長の実力を、その身で味わうことになるわよ。おわかりかしら？

(主人公が慌てて首を縦に振る)

(普通の口調に戻る) ふふ、そんなに緊張しないで。あなたはそんな人じやないっておばさん信じてるから。万が一のための忠告ですよ。

《正面、通常距離、通常音量》

それじゃオフェリアちゃん、また遊びに来てね。フローラが待ってるから～人間さんも、機会があったらまた会いましょう。

【オフェリア】

はい、また今度、クレアさん。自然のご加護があらんことを。

(演出：足音)

(キャラクター：クレア退場)

《やや左、通常距離、通常音量》

はあ……ノエル様ったら、また余計なことを……

【主人公】 クレアさんとかなり親しいみたいですね。

あっ、クレアさんですか？ふふ、聞いて驚かないでくださいね？クレアさん実は――

【主人公】 前族長ですよね、うん、知ってました。

……むう。なんで知ってるんですか？さっきのこそこそ話、一体何を話してたんです？

【主人公】 大事な大事な人生忠告ですよ。

(頭を傾く、理解できていないように) 人生忠告？

……ともあれ、私がまだ子供だった頃、ノエル様が魔法研究に没頭している時は、いつもクレアさんがお世話を焼いてくれました。

そして今は、週一回くらいで私がリヴェンダルの子供達に魔法を教えることがありまして、クレアさんの娘のフローラちゃんもその一人なんです。

縁って、本当に奇妙なものですよね、ふふ。

【主人公】 あれ？オフェリアさんとノエル様って、一体どのような関係なんですか？

あら、言ってませんでしたか？

私、孤児なんです。ノエル様に拾われて、魔法を教えていただきました。言うならば義母ですね。

【主人公】え！？ノエル様あんなにも若く見えるのに……お母さんというよりお姉さんという方が相応しいというか……

あはは、エルフは見た目の年はとりにくらいですから。フローラちゃんだって、クレアさんの第二子なんですよ？

【主人公】二児の母だと……全然そのように見えない……エルフの女性恐るべし……

女性だけではなく、男性もですよ？

これについては少しだけ自慢してもいいかな、ふふ。

(カット割り：時間経ち)

《正面、通常距離、通常音量》

あと少しで、日が暮れそうですね。交換所に行く前にノエル様の様子を見に行きたいので、今日はこのあたりで切り上げましょう？

身体はもうここまで回復していますし、またここに来たくなつたらいつでも仰ってくださいね。

では、そろそろノエル様の家に行きましょうか。

【主人公】本当に、あの木の上に……

あら、そんなに気になりますか？あの木のこと。

もしかして、高いところが怖い、とか？

【主人公】いや、小さい頃、木登りしたら下りられなくなつてちょっとトラウマというかなんというか……

ふつ、ふふふ。木登りしたら下りられなくなつただなんて、まるで子猫のようですね。

【主人公】いやー、面白ありません……

いえいえ、からかうつもりはないんです。ただ、「物静かな人だなー」と思っていたので、子供時代はそんなやんちゃな子だったと知って少々驚きました。

でも、多分ご想像とは大きく違いますから、私を信じてください～

○Scene 7：ノエル自宅

(アンビエント：ノエル自宅ラボ)

(演出：ドアノック)

【オフェリア】

《正面、通常距離、やや大きい音量》
ノエル様、入ってもよろしいですか？

(キャラクター：ノエル、部屋の中に)

【ノエル】

《後ろ、通常距離、通常音量》
ん？ああ、オフェリアか。
《やや大きい声》
入っていいぞー

【オフェリア】

お邪魔しまーす。

(演出：ドア開け閉め、足音)

【ノエル】

《正面、通常距離、通常音量》
なんじゃ、足音が多いと思ったら、小僧もおるのか。
まあよい、ここに滞在している間にアルフヘイムを見て回って損はない。
帰れば消されるんじやけどな。
というか小僧、なんか妙にそわそわしとるぞ？なにかあったか？

【オフェリア】

《正面、通常距離、通常音量》
あ、あはは……
「こんな高いエレベーター、初めて」と、仰っていました……

【ノエル】

(呆れる) はあ……オフェリアのところは問題なさそうじゃが、アルフヘイムでは木の上の家
こそ普通なんじや、慣れないと大変じやぞ？

(わざと言うように) 木の中でこの有様じやと、ミレイユババアのところの外が丸見えのやつ
なんて……

【オフェリア】

(怒る) ノーエールーさーまー

【ノエル】

(慌てて) はいはいこの話はやめたやめた。小僧がここで吐いたら片付けるのは妾じやし。

それにもしても、人間の小僧が本当に魔法の使い手とは……

さっきのも、リンクちゃんを通じて言葉を伝えたんじやろ？

リンクちゃんの編成は簡単とはいえ、それなりの技術が必要なんじや。案外、魔法の筋がいいのかもしけんのう。

で、オフェリアは今日は治療用の薬を交換しに来たのじやな？

【オフェリア】

はい、今夜早速、初めての治療を行う予定です。

【ノエル】

そうか。頑張れよ。お前も、小僧もな。

【オフェリア】

ところでノエル様。

【ノエル】

なんじや？

【オフェリア】

もしかして……今日もまる一日家に引きこもっていたのですか？

【ノエル】

(鬱陶しがる) ……またか。いいじゃろこれくらい、今日はせっかくの休みなんじや。
族長にも休みが必要なんじやぞー

【オフェリア】
休みの日だからこそ身体を動かした方がいいと思いますよ？

【ノエル】
(駄々をこねる) なんでじゃー
外に出るのは面倒じゃし外におっても面白くないし魔法を弄る方がよっぽど楽しいわー

(演出：足音、窓開け、カーテン開け)

【オフェリア】
それならせめて窓を開けて換気してください。この部屋、ダークエルフの地下牢みたいになつてますよ？

【ノエル】
いやそこまで言わなくともいいじゃろうが！妾の研究室なんじやぞここは……
(鬱陶しがる) 夜になつたらちゃんと外で散歩するから、これで満足じゃろ？

まったく……まさかお前、これを言うためにわざわざここに来たのか？

【オフェリア】
ノエル様の生活はあまりにも不健康ですので。

【ノエル】
どうせエルフは長生きじゃしこれくらい大丈夫じゃろうが！
はあ一オフェリア、お前この年でもうババア臭いぞ。

【オフェリア】
私だって小言の多いお姑さんのようになりたくはありません、ノエル様こそ少しくらい自覚をお持ちください。

ほら、洗ってない食器がまた溜まっているではありませんか、これくらいちゃんとやってくださいよ……

【ノエル】

(面倒がる) めんどくさいしやりたくないしどうせまた使うし適当に一

【オフェリア】

(再び怒る) ノーエールーさーまー

【ノエル】

(慌てて) わかった、わかったから。ちゃんとやるからまったく……

【オフェリア】

(疑ってるよう) 本当ですか?

【ノエル】

食器洗いくらいのことで嘘についてどうする?

というか小僧の治療もあるんじやろ?ここでぐだぐだしてもいいのか?

【オフェリア】

あっ、本当でした……そろそろ帰らないと……

ノエル様、信じていますからね。

【ノエル】

(鬱陶しがる) はいはいさっさと帰れよ!帰れ!

【オフェリア】

(元気よく) またお邪魔させていただきまーす~

(演出:ドア開け閉め、足音)

(キャラクター：オフェリア、主人公退場)

ACT 2

4、光の名残が滲んで

||||登場人物：オフェリア、主人公

||||トラック内容：川辺の二人、オフェリアの治療魔法

○Scene 1：オフェリア自宅

(シーン：晩御飯のあと)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント、夜)

《正面、通常距離、通常音量》

ご馳走様でした！

あっ、片付けは私がやりますのでお構いなく！

「居心地が悪い」？ふふ、それなら、一緒にやりましょうか。

(演出：水の音、食器洗い)

【主人公】えっと、族長は、ご自宅でいつもあの様子なんですか？

《右、通常距離、通常音量》

(ちょっと困ったように) そうですよ……ノエル様は、家に籠って研究に没頭し始めたらいつもあんな状態ですから、定期的に見に行かないといと。

昔、私がまだ子供の頃はきちんと一から家事を行ってましたけどね。一人暮らしをしたら今のようにになりましたよ……

【主人公】それほど、オフェリアさんことを大事にしていたからでしょうね。

「私を大事にしてくれていた」のはもちろんわかってますけど、私からすれば、ノエル様はもっと自分のことを大切にした方がいいと思います。孤児の私を育て、魔法を教え、他人の私の為に色々と頑張ってくれた方だから、尚更です。

親孝行……というのは大袈裟かもしれませんけど、ああやってちょくちょくお家にお邪魔して、少しでもいいので、恩返しをしたいんです。

【主人公】やっぱり優しいですね、オフェリアさんは。

いえいえ優しいなんて、これくらい当たり前ではありませんか。

あなたたって、ご両親のところに帰るのでしょうか？

(短い沈黙)

あっ、申し訳ありません、聞いてはいけない話でしたね……

【主人公】いや、実は僕も孤児なんだ。物心のついた頃から、修道院のシスターたちに育てられてね。オフェリアさんが心苦しく思うことはありませんよ。

そう、ですか……

《独り言、小さい声》あなたは、私と同じですね。

(短い沈黙)

《通常音量》

あっごめんなさいね、なんか重い空気になってしまって……

【主人公】いえいえ、どうせ過去の事だし、大丈夫ですよ。

そうですね、もう過ぎたことですし、この話は終わりにしましょう。

あっ、私についてなにか知りたいことがあれば遠慮なく仰ってくださいね！違う種族だからこそ、お互いことをもっと共有できればいいなーと思っています！

【主人公】そうですね……そういえば、オフェリアさんって普段どんな仕事をしているんですか？

普段の仕事？ああ、「神官」についてですね。

んー、「神官」や「司祭」という呼び方は宗教的な響きがあるかもしれません、私達エルフは神ではなく、自然そのものを信仰していますので、「神官」というのは単なる職位なんです。ノエル様の補佐役……みたいな立ち位置でしょうか。

と言っても、そんな大層な役職ではありません。実際のところ、ノエル様より村の皆さんからの相談が多いですね、物探しとか、ふふ。

【主人公】じゃあ服は？

服は……単なるノエル様の趣味で、「『神官』だからそれっぽい服を用意したぞ」と言わわれて。本人はノリノリですし、村の皆さんからも好評のようで、いつの間にか定着していました。着心地が良くて私もかなり好きです。

綺麗、ですか？ふふ、ありがとうございます。村の皆さんもいつもいつも「綺麗」だと仰ってくださいますけど、私には見えないので、少し残念です。

(演出：水音停止)

この皿をこちらの棚に……

(演出：食器棚閉め)

これで、片付けが終わりましたね。お手伝いありがとうございました！

(二人がテーブルに戻る)

《正面、通常距離、通常音量》

えっと、まだ時間が大丈夫そうなので、少し休憩してから治療を始めましょうか。

あっ、そういうと、治療についてきちんと説明しておいた方がいいですね。

実は、「治療」という言葉は的確な表現ではありません。

魔法で身体を回復させるのではなく、魔法を使って身体の治癒力を增幅し、回復を普段の数倍程度加速させます。

外力による回復より、身体そのものに刺激を与える方が早いですから。

リヴェンダルで言いましたけど、この魔法には薬が必要なんです。

まずは薬を身体に塗りつけ……あっ……

【主人公】どうしました？

(急に恥ずかしく) い、いえ、その一ですね、え、えっと……施術中は、身体への接触が必要で……

【主人公】もしかして、ずっと……ですか？

は、はい、治療が終わるまで、ずっと……です。

も、もしお気に障るなら、申し訳ありません！

ああーでも、く、！背中だけでいいのです……

【主人公】わ、わかりました！つまり背中をマッサージするのですね！

は、はい！そうです！背中のマッサージみたいな感じです！大丈夫ですか？

【主人公】もちろんです！むしろ嬉しい……いえ、なんでもありません……

よ、良かったです～。私としたことが、どうしてこんなにそわそわしているんでしょう、あ、あはは～

(正常口調) この治療魔法の効果を最大にするためには、月あかりを直接浴びることが一番です。

今日は月がよく見えますので、外で行うのが一番だと思います。こちらも問題ありませんよね？

なら、せっかくですし、私のおすすめの場所に行きましょうか、ふふ。
あと少し休憩したら、出発しますね。

○Scene 2：川辺・道中

(シーン：オフェリアと主人公が森の中を歩いている)

(アンビエント：森のアンビエント、夜、川のせせらぎ)

《やや左、通常距離、通常音量》

あと少しで着きます。

一体どんな場所か、分かりますか？

【主人公】……この音は、水の音……？なら……川辺ですか？

はい、ご名答。川辺です。

この川は、エルフたちが大浴場として使っているんですよ。

【主人公】え！？

ふふ、そんなに心配しないでください。外から見られないように、視覚遮断の魔法……「カーテン」がありますので。

あっ、ちょっと尋ねたいことがあるんですけど、人間の入浴はどうやってするのですか？

なるほど……「お風呂」と言うんですね。

「湯船」という専用の容器まであるのですか？ふふ、かなりお好きなようですね。もちろん私達エルフも大好きですけど、入浴は基本的に直接川で済ませるので、「湯船」という概念はなかったです。

そういうえば入浴の時にいつも温かいお水を使い……「お湯」と言うんですね。
人間の国ではどうやって水を温めるのですか？大釜に入れて、下で木の枝や石炭を燃やして、温まつたら火を消す……みたいな感じでしょうか？大まかに合ってます？

え？でん、き？「でんぱ」とは、違いますよね？
エネルギー……魔法のエーテルと同じですか？
イカヅチ？ガラス瓶に？
(首を傾げる) ……ん？

【主人公】すみません……なんか説明がヘタで……

うふふ、もし説明しづらいことでしたら無理しなくてもいいんですよ。私もちよつと気になつただけですから。

○Scene 3：川辺

(シーン：オフェリアと主人公が川辺で)
(アンビエント：夜、川のせせらぎ)

《正面、通常距離、通常音量》
(ややテンション高い) 到着いたしました！とても綺麗な川でしょう？
月あかりが広い水面に反射した光景も、非常に素敵だと思いませんか？

【主人公】ああ……あれ？どうしてオフェリアさんにも見えるのですか？

ふふ、どうやら私にも「見える」ことに戸惑っているようですね？

月あかりには大量のエーテルがあるって御存知ですよね？
私の感知力は、主にエーテルに向けています。
水面が光を反射すると同時に、エーテルも同じく反射されます。ですので、光が見えない私でも、こんな景色が「見える」のです。
そして、今日みたいな満月の時は、いつもより美しく……

はっ！申し訳ありません、思わず見とれてしまいました！
私達、月見をするためにここに来たわけではありませんよね。

【主人公】っていうか、一人もいないですね。

ふふ、お気付きでないかもしれません、一人もいないっていうのは違うんですよ？
もっとよく目を凝らして見てください。

例えば、あちらの方に、星みたいに点滅しているものが見えますよね？

【主人公】あ、本当だ。

あれが、「カーテン」の効果ですよ。

つまり、あのあたりには、ほかのエルフがいるということです。

私達は入浴するわけではありませんけど、あなたは上の服を脱ぐ必要がありますし、一応カーテンを張っておきますね。

《左から右、通常音量、独り言》

ここから……ここらへんに……

(演出：オフェリア魔法展開)

《正面、通常距離、通常音量》

はい、これでできました。では、好きなところに座って、上の服を脱いでください。今から薬を準備します。

(演出：オフェリア魔法展開、足音)

《後ろ、やや近い、通常音量》

それでは、薬を塗りますね。お背中、失礼します……

(演出：薬を塗る)

(薬を塗りながら)

今は少々肌寒いかもしませんが、少しの間我慢してください。

施術が始まったら、治癒力が活性化して、身体はすぐ熱くなります。

もし耐え難いと思いましたら、遠慮なく仰ってくださいね。治療を中断して、背中を流しますので。

(演出：薬を塗る、少しの間続く)

これで大丈夫ね……

それでは、施術を始めていきます。背中、失礼しますね！

(演出：オフェリア背中を触る、治療魔法展開、背中マッサージ音、以下続く)

こんな感じで、ゆっくりと、ゆっくりと、背中を上下に……

大丈夫ですか？何か変な感じはありませんか？

手のひら、暖かいですか？それは治療がちゃんと効いてる証拠ですよ。

(少し時間経過)

【主人公】オフェリアさん。

はい、なんでしょう？

【主人公】ここはいつもこんなに静かなんですか？

いいえ、逆ですよ。今日は珍しく人が殆どいませんが、普段はかなり賑やかなところです。でも、人が多いほどカーテンを張れる範囲は狭くなります、仕方ないことですけど。

はい、人間と同じく、みんな大好きですよ、水浴び。

体を清めるのももちろんんですけど、今日みたいに月がよく見える日は魔力もきちんと補充できるので、日々の疲れが取れやすくなるんです。今夜初めて治療を行うのもその為です。

(少し時間経過)

私の感知力と魔法のカーテン、どっちが強いつ……

(わざと) あらら、もしかして私を疑ってるのですか？

ふふ、冗談ですよ。

実際のところ、意識を集中させれば、なんとなく「カーテン」の向こう側もわかるのですが、私にそんな趣味はありませんから。

あなたも、別の人気が「お風呂」をする時は、覗くことなんかしませんよね？ふふ。

【主人公】でも、確かに何十キロにも渡りますよね、オフェリアさんの感知力。ぶっちゃけ、もしオフェリアさんが知りたいなら、どの人がどこでなにをしているのか、全部把握できるんじゃ……

仰る通り、私が感知力を集中させれば、全アルフヘイムの状況を把握できます。もちろん、どの誰がなにをしているのかも。

でも、皆さんを監視するわけがありませんよ。

仮にしているのなら、ノエル様のところに行く必要はありません。家からリンクちゃんを通じてノエル様にガミガミ言ってやりますから、ふふ。

(時間経過)

随分汗をかいできましたけど、大丈夫？休憩しましょうか？

わかりました。それでは、背中を流しますね。

(演出：背中マッサージ終わり)

(演出：水の音、タオル、背中流し)

……当たり前のことかもしれません、人間の背中、やっぱり、私達と全然違いますね。

(少し夢中になって) 筋肉質で、ごつごつしてて、触れた感触もまるで違います……

あっ、すみません！なんか気持ち悪いことを言ってしまいましたね！

【主人公】いえ、大丈夫ですよ！

(ぱつりぱつりと)

あなたがここに来てもう一週間経ちましたし、今更かもしれませんけど、私……人間と会うのは初めてなんです。

以前、ノエル様から「耳が丸い」種族だと聞きましたが、それくらいしか知りませんでした。そして、まともに見えないからでしょうか。昔から、物を指で確かめるのが好きなので、ついつい……

(恥ずかしく) ああーもうなにを言ってるの私、治療の最中なのに、本当の本当に申し訳ありません！

【主人公】えー、えっと、自分から言い出すと恥ずかしいですが……触るくらいなら、全然大丈夫ですので……

(少しテンション高く) えっ……ほ、本当ですか？好きにしても大丈夫ですか！？

ああいいえ、好きにするっていうのはやっぱりおかしいですよね！なんというか、私が言いたいことはですね、その……

本当に、いっぱい「確かめ」ても、いいですか？

【主人公】オフェリアさんが僕みたいのが嫌でなければ、どうぞ。

(かなり嬉しく) はあー！あ、ありがとうございます！

な、なら、失礼して……

(演出：背中触る)

(ぱつりぱつりと) 私、こういった治療魔法が得意なので、施術する為に、男性エルフの体を触ることがありますけど、あなたの体と比べると、全体的に細いし、どこか柔らかい印象でした。

(少し夢中になって) そして、この体温……私達よりずっと温かい……
もしエルフをゆったりおっとりしている月あかりのように例えるなら、あなたは、まるで太陽のようです。力強くって、温かくて、皮膚に触れるだけでも、ポカポカして気持ちいいです
……

(オフェリアが主人公の背中に頭を預ける)

【主人公】 お、オフェリアさん！？

えっ…… (慌てて) あっ！す、すみません！

【主人公】 もしかして、魔力を使いすぎて疲れましたか？

いいえ！これくらいは大丈夫です、疲れていませんよ！
ただ、あまりにも気持ちいいので、リラックスして……頭を背中に……

(恥ずかしく) あ、あはは、私小さい頃からいつもそうでした。放心したら、いつも体を預けてしまうので……もういい歳の大人なのに、子供っぽいですよねこういうところ。

そろそろ、治療を再開しましょうか？

では、薬を塗り替えますね。

(演出：オフェリア魔法展開と塗り)

(薬を塗りながら)

あの、人間の女性もこんなにごつごつしてるのでしょうか……？
女性の方がずっと柔らかい？わ、私の手みたい……？ふふ、それなら私達と大差ないみたいですね。
種族の違いって本当に不思議です。

では、再び、施術いたしますね。

(演出：オフェリア魔法展開、背中マッサージ再開)

【主人公】少し、エルフについて教えてくれませんか？

私達の話、ですか？もちろんいいですけど、どこから話しましょうか……？

結界を張った理由？そうですね……これについては、また少々長い話になるかもしれません。

他の種族からはエルフは寿命が長く、魔法能力と感知力が優れていて、個体能力の高い種族だと思われていますよね。

しかしその反面、繁殖能力は極めて低いんです。

エルフの寿命は約800年、きちんと夫婦関係を結んだカップルは数多くいます。

でも、その中で、本当に子を授かったエルフは非常に少ない。

クレアさんみたいに子供二人も授かったエルフは、百年に一人しかいませんよ。

【主人公】もしかしてエルフの多くが集落の外に住むのも……

はい、ご想像通りです。子供を持ったエルフや管理者のみ、集落の中で住むことができます。集落の管理者は、例えばリヴェンダルではノエル様ですね。あの地域で一番魔法に長けたエルフで、万が一のときに、集落を守る役目もあります。

リヴェンダルに行く道中で、「エルフは数千人しかいません」と言いましたよね？

人口が少ないだけで、「国」としてのアルフヘイムは、そんなに強くありません。

確かに、魔法を充分に使えるエルフは強いですが、実際に戦争が起こってしまった場合は、いくらひとりが強くても、百倍以上に数がいるゴブリンやドワーフの軍隊には勝てません。

そして残念なことに、アルフヘイムは歴史上、何回も隣国同士の戦争に挟まれ、巻き込まれてきました。

最初は飛び火だったのですが……いつの間にか全面的に戦争の沼に引きずられました。

あの時は、魔法頼りでなんとか勝ちましたが、今、きちんと装備と武器が揃った軍隊の前では、アルフヘイムは無事ではいられません。

そこから導き出した結論が、外との関係を全部切り捨てて、アルフヘイムという地域全体を匿うことです。あなたが事故で飛び越えたアルフヘイム大結界は、その為に開発し始めたのです。

【主人公】すごい……こんなスケールの魔法、想像すらもなかつた……

開発の責任者が、他の誰でもないノエル様ですよ。

魔法に関しての研究と発明なら、ノエル様は全アルフヘイム、いえ、多分世界でもトップですけど、実際見たように、いろんなところで残念な人ですよ、ふふ。

【主人公】ああ、わかる。僕の研究室にもそういう人いるしな。いつも大真面目で、口がちょっぴり悪いけど、能力も凄いし、普通にいい人ですよ。

なるほどー、人間の国にも似たような人がいるのですか。
やっぱり、種族が違っても、研究者の皆さんには似た者同士ですね。

(短い沈黙)

……あなたは、やっぱり自分の國の人達のことを心配しているんですね。
「急いで帰らなきやいけない」と言っていましたし、それに、あなたの魔力から、ずっと「不安」そうな感じがしていましたから。

知っています？魔力の状態は、使用者の心境を示しているんですよ？
極わずかで、普通では感じられないかもしれませんけど、私には少しだけ、わかるんです。

(短い沈黙)

私、あなたの「不安」を取り除くことはできませんけど、出来るだけのサポートはいたします。
ほら、同じ孤児同士なんですから、私をあなたの家族だと思って、もしなにかありましたら遠慮なく言ってくださいね？

【主人公】……ありがとう、オフェリアさん。これからも、よろしくお願いします。

はい、治療のことは、私にお任せください～ふふ。

(時間経過)

(演出：背中マッサージ中止)

はい、今日の施術は終わりました！
やりすぎると、体に悪影響を及ぼす可能性もありますので、今日は、ここまでにしましょう。
では、最後に背中を流しますねー

(演出：背中流し、タオルで背中を拭く)

全部終わりましたよ！お疲れ様でした！

《正面、通常距離、通常音量》

はい、上の服です。

(演出：主人公着衣)

ふう……私も少し、汗をかいてしまいました……

ついでに私もちょっと水浴びをしましょうか……

少し待ってくださいね、すぐに済みますから。

【主人公】いえいえ、ゆっくりして大丈夫ですよ。オフェリアさんも大分疲れているはずですから。

ふふ、では、お言葉に甘えて、ゆっくりと水浴びします。あとで一緒に帰りましょう。

カーテン、張りますね～

(演出：オフェリア魔法展開、水浴びの音が少し続く、フェードアウト)

5、茜雲と翠雨

||||登場人物：オフェリア、主人公

||||トラック内容：暑い休日に涼しさを求める二人、森の奥の泉へお出かけ。

○Scene 4：オフェリア自宅

(シーン：オフェリア宅で二人が氷魔法で涼む)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント)

《正面、通常距離、通常音量》

(嘆く) 暑いですね……

【主人公】暑いよね……

まさか、この時期になっても、氷魔法を使う日がくるとは……

【主人公】それにしても便利ですね、氷魔法って。

ふふ、確かに便利ですよね。腐敗しやすいものをそのまま氷の中に閉じ込めれば保存期間が長くなります。ヴァルガードにも、似たような機械があるんですよね。なんて名前でしたっけ？

【主人公】フリーザー？

そうそうそう、フリーザー。魔法を使わずに温度を調節できるなんてすごいですね。

【主人公】ここ最近、エアコンディショナーというものがありまして、フリーザーの家庭用バージョンみたいで、付けたら快適なんですよ。

エアコンディショナー……部屋の空気を調節、ですか？

ふふ、ますますヴァルガードに行きたくなりました。聞いてるだけでもかなり面白そうです～

【主人公】オフェリアさん、エルフとしての年齢はまだまだお若いんですね？ならきっと機会がありますよ。

確かに、私はまだ若いですしあれぞの機会は訪れるでしょうけど……

(ちょっと暗く) 私がヴァルガードに行っても、あなたはもう私を覚えてはいませんので……

【主人公】それは……すみません……

(強引に明るく) でも、嘆いても仕がないことですよね。本当にその時が来て、また私とお友達になってくださるのなら、許してあげます。なんてね、ふふ。

【主人公】ああ、もちろんさ。

あっ、そうでした！すぐ近くの森に泉があります！地底から湧きあがった水で、ちょっとぴり冷たくて涼むには最適です。

はい、ここも私の一押しのところですよ～。まわりの木々も茂っていますので、そこに佇んでいるだけで、すごく落ち着くんです。

最近、私もちよつと疲れ気味でしたので、もう少し日が落ちたら、一緒に行きましょうか？

○Scene 5：森の奥の泉

(シーン：二人が森の奥の泉で休んでいる)

(アンビエント：泉の音と、風が少し森をすり抜ける音)

《正面、通常距離、通常音量》

はい、到着しました！ここです。

足元、気をつけてくださいね。元々木陰が多いですし、もうすぐ夕方ですから。

よい、っしょ……

(演出：二人の足音、足が水に入る音)

《やや右、通常距離、通常音量》

(だらしなく) はあー……気持ちいいですねー

あっ、ご、ごめんなさい、気を緩めすぎてちょっとだらしなくなりました、えへへ。

ささ、あなたも一緒にー

(演出：足が水に入る音)

(長い沈黙)

《右、通常距離、通常音量》

あなたがアルフヘイムに来てから、もう一ヶ月経ちましたねー

「思ったより早い」、ですか……

ふふ、いいことではありませんか、「退屈していなかった」証拠ですよ。

(暗く) でも、あと一ヶ月で、あなたはここにいた記憶を、消されてしましますね……

(ぱつりと) 時々、思うのです……私達を匿っているこの結界は、果たして正しいのでしょうか。

確かにこの結界のおかげで、アルフヘイムは昔よりずっと安定して、素晴らしい国になりました。

戦争に参加した老人たちが「一番いい時代」だと言い出したくらいです。

でも、これで……本当に良かったのか？

今週、リヴェンダルの子供たちに魔法を教えた時、その中の一人の子供がこう言いました。

「こんな複雑な魔法を学ばなくてもいいじゃない？ 結界があるし、悪い人が来たら、ノエル様やオフェリア先生がやっつけてくれるんですよね？」

「子供が駄々をこねているだけ」のように聞こえるかもしれません、問題は「授業を受けたがらない」ということだけではありません。

この前、あなたも魔法の授業を見に来ましたよね。ほら、フローラちゃんに飴をあげた時の。

私が子供だった頃は、もし広場に異種族の商人が来たら、子供たちがその人を囲んで、噂話でもなんでも聞きました。

しかし、あなたに関して、フローラちゃん以外の子供たちからはなにも聞かれませんでした。
「人間さんの国はどんな国ですか？」といった質問さえありません。

そう、次の世代の子供たちから、「好奇心」というものが失われています。
彼らの天性と言っても過言ではありませんのに。

その子達がこの先 800 年、ずっとこの箱庭の中で生きていって……

先代の私達によって「隔離」されて、世界も知らないまま、「今までいい」と満足して。

本当に、これでいいのか……

(短い沈黙)

あっ、申し訳ありません。思わず長く喋りすぎました……

私達の問題を聞かされても困りますよね！せっかく休憩の為にここに来たのに……

ただ、彼らに、責任を感じてしまって……

私、あの子達の教師をしているだけではなく、ノエル様と一緒にアルフヘイム大結界を見張つているんです。

展望台の番人……みたいな役目でしょうか。

おかげで、「アルフヘイムの目」という称号も頂いて。

(苦笑い) おかしいですよね、私、まともに見えませんのに……

【主人公】じゃあひょっとして……私がここに来た時も……

はい、あなたがここに現れた時も、私が第一発見者なんです。捜査隊の皆さんをお呼びして、あなたを見つけ出し、手当てをしました。

【主人公】やはりそうでしたか……でもどうしてあの時、僕を救ったんですか？僕は異種族の者で、アルフヘイムの状況じやまずいじゃないですか。

こんな状況でも、あなたを救った理由ですか……

ふふ、簡単ですよ。守りたいからです。

アルフヘイムも、エルフの子供達も、あなたも。

でも、あなたにだけは、ちょっと違った理由もあります。

あの時のあなたを見て、かつての自分を思い出したのです。

(ぽつりと語る) 私、物心がついたときから、ずっと森の奥でひとりで生きてきました。
両親はわかりませんし、目も見えません。

しかし幸いなことに、私は物を感じる力が強かったです。

初めて治療を行った時、「私の感知力はエーテルに向けてる」って言いましたよね？

ご存知の通り、エーテルは空気のようにこの世界に満ちていますが、物質によってエーテルの付着量は違います。

なので私は、みんなが言う「色」の区別はできませんが、物と物の区別はできます。

命のある生物の場合はちょっと違いますが、ややこしくなりますのでそれは後にしましょう。

私のこの「感知力」は、何十キロにも及ぶとご存知ですよね。実は、それだけではあります。速く動くものほど、より鮮明に「映り」ます。

この力を使って、幼い私は森のあらゆる危険から生き延びてきました。

問題なのは、食料です。

感知ができますが、身体能力は普通のエルフの子供と変わりません。

まともな狩りもできませんし、多くの場合は果物で飢えを凌ぐしかありません。

しかし、果物では限界があります。冬が来たら、動物を狩るしかありません。

親のいない子供には、自然という環境は流石に厳しすぎました。

お腹が空いたゆえに、元々弱かった力が更に弱まって、捕れるはずの獲物も逃して……

ある冬の日、体力が尽きた私は、手足に力も入らず、道端で倒れ、そのまま意識を失ってしまいました。

再び目を覚ました時、私の前に現れたのが、ノエル様です。

このように、私も、誰かの好意によって救われた身。こうやって生きているのも、全部ノエル様のおかげ。

もちろん、そのときはそのときですし、比べるものではありませんが……

瀕死の命は、救う方法があるなら、それを置いてけぼりにするのはあまりにも酷すぎる。

それと、なんとなく、あなたがここに現れたことは何らかの「さだめ」のような感じがします。

……なんてね。神官を務めたせいで、こういう「勘」も身についちゃったかしら、ふふ。

【主人公】（小さい声）さだめ……か……

（長い沈黙）

【主人公】 そういえば、目隠しを取ることはほぼありませんよね、オフェリアさんは。

あっ、目隠しですか？ これは、単純な目隠しではありませんよ？

さっき結界の見張りをしているって言いましたよね？

これこそが、結界のエーテルの動向を見られる装置なんですよ？

もちろん、開発者はノエル様です。

【主人公】でも、それでは普通にメガネかける方が自然じゃない？ わざわざ目隠しに……これもノエル様の趣味ですか？

あはは、流石のノエル様にもそんな趣味はありません。目隠しは私からの提案です。

私の瞳、多分みんなと違いますし、よそから見ると、不気味かもしれませんので、こうやって隠しているんです。

えっ？見たい、ですか？
だ、ダメですよ、さっき言ったでしょう？普通の瞳と違うって……

「どうせ忘れる」って……
(わざと) もう、いけませんよ？これは神官にしか知りえない秘密なんですから。
なーんてね～

(ぽつりと) いつか……心の準備ができたら、見せてあげてもいい……かもしれません。

(少し沈黙)

【主人公】でもオフェリアさんの「視覚」は、一体どのようなものなんでしょうか……

私の「視覚」？つまり私が「見る」ものですか？
うーん、どう説明すればいいでしょうか……
例えば、あなたが今着ている服の襟の部分、かなり複雑な紋様がありますよね？

私からすれば、服全体が同じように見えて、だから一

(オフェリアが立ち上がり、主人公の真正面にしゃがむ)
(演出：水の音)

《正面、やや近い、小さい声》
こうして、実際に手でこの部分を感じないと、なにもわかりません。私にとっての「確かめる」は、こういうことなんです。

《通常音量》
はっ！近すぎましたよね！申し訳——

【主人公】いえもっとしても全然大丈夫ですので！

えっ？本当に……もっとしても……いいですか？

《声が通常音量から段々小さく》
(恥ずかしく) じゃ、じゃあ、実際に、あなたの背中だけではなく……
実は、その……お耳を、触りたいのです……
は、はい。私達と一番違ったところですので、その、もし、嫌でなれば……

《通常音量》

いいのですか！？本当に？失礼なことしてません？

そ、そうですか……あ、ありがとうございます！

《小さい声》

では……私、どうしたらしいでしょか？

このように、正面からいきなり触るとびっくりしちゃいますか？

そ、そうですか、そんなに敏感ではありませんか……わかりました。なら、いきますよ！

(演出：耳を触る)

本当に、耳が丸くて小さいんですねー

不思議ー、なんかかわいいです、ふふ。

でも、私達と同じく、耳にちょっとごつごつした部分がありますね。

この機会にきちんと形を覚えます！

(演出：耳周辺を触る)

あの、私、できるだけ優しく撫でるようにしていますけど、もし痛かったら言ってくださいね！

えっ、逆……ですか？くすぐったい？では、もう少し力をいれましょうか？

はい、わかりました。

(演出：耳周辺を触る)

ふむふむ、ここは、耳の裏側で……輪郭に沿って中を辿れば……

ここは耳の穴で、そして、更にその下には……

(演出：耳たぶを触る)

まあ！ここ、ふにふにしてて気持ちいいです！

そしてとっても柔らかくて……猫ちゃんの肉球より柔らかいです……

グリグリ……グリグリ……ふふ。

ここ、なんて言うんですか？

「みみたぶ」？名前もなんだかかわいい響きですねー

いいなー。私達の耳にはこういう部分はありませんから。

もっと、触ってみてもいいですか？

引っ張っても押してもいい……？本当に？痛くない？
だって、柔らかそうで、潰れるんじゃないかと……

大丈夫ですか？では、更に強くしますね……

(演出：耳たぶ、マッサージ、続く)

《正面、やや近い、通常音量》

ふうー、ずいぶん長い間触ってましたねー
このまますっと耳たぶを触っていたいですが、今日はここまでにしますね！
おかげでしっかりと形覚えられました！ありがとうございます～
それじゃあ、そのお礼に——

【主人公】いやお礼なんて……

いいえ、断る前に話を聞いてください！そのお礼に……

《右、直距離、囁き》

私の耳を、触ってみませんか？

《小さい声》

ふふ、やはり興味津々ではありませんか。
このピンと尖った耳は、私達の誇りでもあるんですよ？

確かに、エルフの耳は気安く触るところではありません。かなり親密な関係でないと失礼な行為ではありますが、今回は、お耳を触らせてもらったお礼ですから。

それに、あなたに、触ってもらいたいのです……

最初にあなたを治療した時に知った、私達と違う、ちょっと高い体温。
その温かさを、もっと感じたいです……ダメ、でしょうか？

ふふ、それでは、隣に座って……

えっ？あなたの膝に……？つまり、膝枕、ということですよね？

なら……ちょっとあなたのお膝に、お邪魔しますね……

よい、っしょ……

(演出：服の音)

《正面、やや近い、小さい声》

……こうやって、誰かの膝の上で横になるのは……子供の時以来です……
昔、クレアさんとノエル様が、よくこうやって私を寝かしつけてくれました……
ふふ、大丈夫ですよ、太ももが硬いなんてそんなことはありませんから。
それでは、耳、優しく触ってくださいね……

(恥ずかしく) うつ……

《通常音量》

い、いいえ、痛くはありません！ただ、触られるのはちょっと不慣れで……
もっとゆっくりと、根元のところから……このように左右にゆっくりとさすって……

【主人公】こ、こうですか？

《小さい声》

(放心して、とろけるように) は、はい……そうです……んふ……
はあ……やっぱりあなたの手は、こんなにも温かい……

(時間経過)

んっ……少し、待って……み、耳の先は……その……かなり敏感で、はあ……
ええ、そこ、ばっかり……はん、はあ一
すこし、んん……待ってください……
(艶っぽく) あんっ……

《通常音量》

……もう、こんな意地悪をしてなにが楽しいんです？
こうなったら私だって……

(オフェリアが起き上がる)

えい！

【主人公】うおっ！

(主人公が不意に押されて、上半身が後ろに倒れる)
(オフェリアが主人公の上半身を見下ろす)

《正面、直近距離、小さい声》

ふふ、ちょっとだけ、仕返しです。

あそこは、普通は他の人に触らせない部分ですよ？むやみに触ったら魔法でぶつ飛ばしますからね？

わ、私から誘ったのはわかってますよ……

(独り言) まさかあんな声が出たなんて……

うえつ！？な、なんでもありませんよ、あはは～

(しばらく沈黙)

(演出：服のごごぞ音)

《やや左、直近距離、小さい声》

あの……もう少し、このまま、あなたに体を預けていてもいいでしょうか？

あっ、私、重くはありませんよね……？

そ、そうですかー。ふふ、安心しました。

(しばらく沈黙)

(演出：オフェリアの吐息、続く)

【主人公】さっき、オフェリアさんが言ってた称号ですけど、なんでしたっけ……？

私の称号ですか？「アルフヘイムの目」ですね。

口にしたらやはり大袈裟でちょっと恥ずかしいです、ふふ。

【主人公】そうそう。あれは一体……？

この称号についてですか？

そうですね、ノエル様は私を拾ったあと、魔法を教えてくれました。

私、魔法の筋は良さそうだったので、感知力のこともあり、ノエル様の助手として色々とお手伝いをしました。

そして、結界がまだ開発中の時から、私のエーテル感知力を結界の管理の一部として取り込もうと、ノエル様がずっと考えていましたね。

この目隠しも、その時からずっと使っていたものです。

そして自然と、結界が正式に起用される時に、私が管理役として働くことになりました。

あれは多分……60年前の事ですかね？私はまだ40才未満の子供で……

人間の年齢に換算すると、大体19才あたりですね。

【主人公】 そんなに若いのか……大変だな……

はい、かなり若いときでした。称号はあの時、ノエル様のお師匠様、ミレイユ様から頂いたものです。私の感知力は、丁度アルフヘイム全域を含んでいますし、その上結界を管理しているので、「危険が見える目」という考え方から、「アルフヘイムの目」ですね。

今思うと、結界も私の兄弟みたいなものですね、ずっと一緒でしたから。

と言つても、ずっと動向を監視しているわけではありませんので、大変というほどの事ではありません。

結界が正常に稼働している時は見てもなーんにも起こりませんので、適当に頭のどこかに置いている感じです。

(短い沈黙)

【主人公】 オフェリアさんは、感知とかでじゃなくて、実際に見たいもののはありますか？

「感知でじゃなくて、実際に見たいもの」ですか……

(夢見るよう) それは、もちろんたくさんありますよ。

自分の服、自分のお家。朝のリヴェンダルの広場。

窓の外の小鳥の羽の色、太陽の光に照らされた翠の葉、あかね雲と泉の水色。

ノエル様の怒った顔、フローラちゃんの絵……

そして、今ここで、私を受け止めているあなた。

(感慨深げに) 全部全部、見たいですよ。

(少し沈黙)

(優しい声で) ……もう、そんなに悲しまないで。

別に生活面では不便もありませんし、みんなを守る役職がありますし。

それに……こうやって、あなたの温もりに包まれたもの。

私は今まで十分、幸せですから。

【主人公】 ……オフェリアさん、僕は、あなたの目になりますよ。

え……？ あなたが……私の目になる……？

【主人公】 ああ。聞きたいこと、知りたいことがあれば、遠慮なく言ってください。僕が知っていることなら全部教えます。

し、知りたいこと全部教えてくれるんですか？ほ、本当にいいですか？
私、あれこれ、要望が多いですよ？うざくはありません？

【主人公】ああ、とんとこい！

(恥ずかしく) だ、大丈夫ですか……では、さっそくですけど……
(囁き) 耳だけではなく、他のところも、いっぱい触ってほしいです……

【主人公】えっ！？

あなたの優しさを、教えてください……
髪やほっぺ、肩や腕……あなたの手に触れられただけで、ぽかぽかして……
すぐに……眠たくなります……
(わざと) 少しこのまま寝て、甘えても、よろしいですか。私のお目々さん？ふふ。

【主人公】も、もちろんいいです……

ありがとうございます。では、私ももっと、あなたのお腹に、ぎゅっと……

【主人公】！？

どうしたのですか、ちょっともじもじしますけど……

お腹がふよふよしてる？いいえ、私からすれば全然……
あっ、でも、もし本当に嫌だったら離れますね……

【主人公】い、いえ、大丈夫ですよ。

ふふ、本当に、どこまでも優しい人ですね、あなたは。
では、少しの間、おやすみなさい……

(演出：オフェリア寝息ループ)

6、月影ブルーノーツ

||||登場人物：オフェリア、主人公

||||トラック内容：晩酌、お出かけ散歩、月夜のダンス、オフェリアのキス

○Scene 6：オフェリア自宅

(シーン：晩御飯のあと)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント、夜)

《正面、通常距離、通常音量》

今夜は、ちょっといいものがありますよ～

はい、これです！

(演出：瓶をテーブルの上に置く)

アルフヘイム特製のフルーツワイン！

昔はアルフヘイム周辺の国まで流通していて、大好評だったらしいですよ。

昨日、フローラちゃんを見に行った時クレアさんから貰ってきました。

甘い口当たりで、晩酌に丁度いいと思います～

ふふ、フルーツワインだからって甘く見てはいけませんよ？

わりと強めのお酒なので、気をつけてくださいね？

【主人公】いや、お酒なら僕はどちらかというと普通ですよ……

ふふ、「僕は普通ですー」みたいなこと言って、実際に飲んだら酒豪だったりして。

【主人公】オフェリアさんこそ案外めっちゃ強いとか。

私？私は……うーん、そうですねー、少なくともノエル様よりは強いかなー
クレアさんとは比べものになりませんけど。

【主人公】……うん、さっぱりわかりません。

あっ、そうでした、あなたはノエル様たちと飲んだことはありませんものね！

たった一ヶ月半なのに、もうずっとここに住んでいる感覚です。ちょっと不思議ですね、ふふ。

簡単にまとめると、ノエル様は本当にお酒に弱いですよ、それに泣き上戸。

【主人公】 最悪ですね……

あはは、「最悪」って程ではありませんよ。クレアさんがいつも事態をまとめてくれているから。

お二人、かなり長い間付き合っていたから、ノエル様の扱いが上手というかなんというか……

あっ、話が逸れましたね。今夜は私達二人だけですし、のんびりと飲みましょう？

(カット割り：時間経過)

はーい、乾杯！

(演出：グラスの音)

(酒を飲む) ん……ふう……やっぱりこれ、美味しいですね～

気付かないうちにもう半分くらいなくなりましたね。

やっぱり強いじゃないですか、あなたは。

【主人公】 オフェリアさんこそ素面じゃないですか。

はいはい、お酒の強さを褒めてもなにも出ませんから、もうここまでにして。

これ以上飲み続けたら少し危険かもしれませんね。今日はここらへんにしましょう？

【主人公】 賛成。正直僕もそうしたいところです。

じゃ、いつものように一緒に片づけましょうか？

はい～

(演出：食器洗い)

一昨日の治療、どうでしたか？

ここまできたらもうかなり慣れたと思いますけど、もしなにか気になることがあつたら遠慮なく言ってくださいね？

【主人公】 ああ、大丈夫ですよ。もう最初のように汗だくにはならなくなつたよ。

最初の頃に比べてそこまで汗をかかなくなったのは、あなたの体が私の魔法に慣れてきた証拠ですよ。

そして、もうすぐ、体が全快するということです。

今の状態なら、声も出せるようになったと思うのですが……

【主人公】 リンクちゃんが便利すぎて、話をするよりこっちの方が早い……

あはは、リンクちゃんを通すと確かに便利ですよね、わかります。

でも、そうですね……あと二週間で、この二ヶ月の治療期間が終わる……

(暗く) やっぱりあなたは、帰らねばならないんですよね……

【主人公】 ……ああ。

(さっきの暗さを振り払うように) ねえ、お酒のせいで体が熱くなってしまったし……ちょっと、森へ散歩しに行きませんか？

今日も、月が眩しいですから。

○Scene 7：森の奥

(シーン：二人は森の奥の空き地で休んでいる)

(アンビエント：森の環境音、夜)

《正面、通常距離、通常音量》

ふうー、ちょっと森の奥に来すぎたかしら……大丈夫？

ええ、私も少し歩き疲れました。

ここ、丁度いい広さですし、月がよく見えますね。ここで少し休みましょうか？

(演出：足音)

《右、通常距離、通常音量》

よいっしょ……

それにしても、人間のさんはお酒をよく飲むってノエル様から聞いてましたけど、本当だったんですね。

【主人公】 まあ、お酒が好きすぎてそれを飲むための店を開いてるぐらいだから間違いないと思う。

飲むためのお店？ノエル様なら大喜びかもしませんね。すぐ潰れますけど、ふふ。

【主人公】飲むだけだとちょっと味気ないから、店で音楽も流すんですよ。

へー、お酒を飲みながら、音楽を楽しむ……凄い発想ですね。

私達の文化にも音楽や踊りはありますけど、大体祭典か儀式の時にしか使わないです。

【主人公】じゃあオフェリアさんも？

はい、楽器と踊り、私も少しだけ学びましたよ？

ほら、「神官」ですから、こういう時こそ本職の発揮どころじゃないですか、ふふ。

エルフの楽器といえば、「ハープ」ですね。長さの違う弦があって、それぞれ異なる高さの音ができます。

すごく清らかな音色が、私は大好きなんんですけど、ノエル様のように上手くは演奏できません……

儀式で演奏する時、繊細なニュアンスが足りないっていつもノエル様に怒られてました……

そういえば、人間さんにはどんな楽器があるんですか？

ヴァイオリン、ピアノ、サックス……ちょ、ちょっと待ってください、そんなにいっぱいあるんですか？

ええ！？これ以外にも……？

【主人公】まあ僕もあんまり知りませんけど、東の国には全然違う楽器があるらしいよ。

東の国、ですか……世界は本当に広いですね……

では、その中で、あなたが一番好きな楽器は？

ピアノって、さっき言ってた、「違うキーを押すと、違う音が出る」という仕組みの楽器ですね。

いいなー、私もピアノの音を聞いてみたいです。

【主人公】じゃあ聞きます？

えっ？ここで聞けるんですか？

【主人公】僕は趣味で作曲しているんですけど、魔法の編成をして楽譜を記録しているんですよ。

曲を、魔法術式にして記録……そして趣味が作曲……
す、すごい……凄すぎます！！！
私、小さい頃本当にいやいやながらハープを学んでいたので、曲を作るなんて到底できません……
でも記録できるということは……再生もできるということですね？

【主人公】「音が出る」程度で、流石に本物とは比べものにならないんですよね……

音が出るだけで十分凄いと思いますよ！こんな魔法の使い方全然想像もしなかったです！
でもね、実際、ピアノの音以上に、あなたの曲に興味があります。
だって今まで全然知りませんでしたよ……私の前でも披露しませんでしたし……どうしてですか？

【主人公】いやーそれがね……やっぱり恥ずかしいというか……

恥ずかしい？曲作りは、恥ずかしいものなのですか？
私からすれば凄いことですし、もっと堂々としてもいいと思いますよ？

【主人公】音楽も魔法も未熟ですし、ちょっと心の準備が必要というか……それに、自分を晒すようなものですから……

技術と関係なく、ありのままの自分を晒すことによって、他の人の心に触れることができる。
音楽に関して、私はいつもそう思っています。
だから心配はいりません、ぜひ、聞かせてください！

【主人公】……じゃ、編成にはちょっと時間が掛かりますから、少し待ってくださいね。

はい、編成ができるまで待っていますね！

(演出：主人公魔法編成)

《正面、通常距離、通常音量》
もう準備できたんですか？では、再生をお願いします～

(演出：BGM 再生)
《独り言、小さい声》
これが……ピアノの音……
そして、あなたの曲……

(音楽に夢中になっている) 凄く、綺麗な音……

《通常音量》

曲名、ありますか？

「月影ワルツ」……「ワルツ」って、どんなものでしょうか？

ダンスの一種？

つまりこれは、ダンス用の曲……ですか？

では、このダンスについて、少し教えてくれませんか？基本のステップで大丈夫ですので。

【主人公】そ、それは流石に下手で……

(おねだり) やっぱり、ダメ、でしょうか？

【主人公】(そんな声でお願いされたら拒否できないじゃん……！)

(主人公がオフェリアを自分の方向に引き寄せる)

(演出：抱きしめる音)

《正面、やや近い、通常音量》

わっ……！

ち、近いですね……「ワルツ」ってこんなに近い距離でステップを踏むの……？

手？手も繋ぐのですか……？

こ、これじゃまるであなたに抱かれ……

い、いえ！嫌ではありません！ただこんな形だと思わなくて……

それで……これから、どうすればいいでしょうか？

音楽のリズムに乗せて、あなたのステップに合わせる……？

は、はい、試してみます！

(少し沈黙)

(演出：ステップを踏む)

うう、想像より難しいです……一歩間違えればあなたの足を踏んじゃいますし……

【主人公】だから僕も下手って言ったでしょう……もうやめましょうか？

い、いいえ！諦めたくはないです！もう少し付き合ってください……！

【主人公】 わかりました。

(カット割り：時間経過)

《正面、やや近い、独り言、小さい声》

ワン、ツー、スリー、ワン、ツー、スリー……
リズムを数えてから……あなたに合わせて……

《通常音量》

な、なんか、いい感じになってきました！

《小さい声》

ワン、ツー、スリー、ワン、ツー、スリー……
(夢中になっているように) このリズムに乗ると、心がとても穏やかになって、気持ちいいです……

《通常音量》

ふふ、あなたと、あなたが作った曲で、ダンスをする日がくるとは……
でもね、あなた……

《小さい声》

この曲、寂しいよ……

ステップの練習の時、曲調をずっと聞いていました。

月明かりだけが、広い広い水面でただ踊っている……そんな光景が浮かびます。

とても、とても綺麗ですけど、とても、とても寂しい。

私が感知できたあなたの魔力より、ずっとずっと……

(少しだけ沈黙)

あなたがアルフヘイムに来てから一ヶ月半。

治療するうちに、あなたは、私が抱え込んだものを分かち合おうとしてくれていますね。
でもあなたも、この寂しさをずっと、抱えていたんですね。

なら、私はどうしたら、あなたのこの寂しさを埋められるのでしょうか……

(演出：服のごごご音)

(主人公を抱きしめる) 例えば、こうやってあなたを私の腕の中に……

《直近距離、小さい声》
(以下、うつとりしているように)
これじゃ、ダメですか……？

【主人公】 オフェリアさん！？

私の体温は、あなたには多分ひんやり感じるでしょうけど……
その寂しさを、私にわけてくれませんか……？

(オフェリアが主人公にキスする)
(キスアドリブ、10秒)

【主人公】 ! ? ! ?

これで、足りますか？もし足りませんでしたら……

(キスアドリブ、20秒)

いくらでも、して、さしあげますよ。

【主人公】 オフェリアさんちょっと待って！？

(突然目が覚めたように)
《正面、通常距離、通常音量》
っは！わ、わわ、わわわ……私！！！えっとー、あのー、ももも申し訳ございません！！！
あの、あのですね！お酒のせいというかなんというか、なんだか自分の感情が抑えられなくな
って後先も考えずあんなことを……

いいえ！謝るのは私の方です、あなたは奪われた方ですから……はうう……
申し訳ございません、混乱させてしまって……
それに、あなたはもうすぐ自分の国に帰るのに、私ったら一体なにを言ってるのかしらね……
あ、あはは……

【主人公】 オフェリアさん……

(さっきのことを遮るように) そ、そろそろ帰りましょうか！
深夜になると、寒くなりますからね！ね、そうしましょう！

【主人公】あ、ああ。

《独り言、小さい声》

ふうー、やっぱりダメですね……私は……

《通常音量》

いいえ、なんでもありませんよ！なんでもありませんから！

さあ、早く帰りましょう！

ACT 3

7、手放したものと

||||登場人物：オフェリア、主人公

||||トラック内容：お別れ前夜、二人の想い、一線を越える

○Scene 1：オフェリア自宅・夜

(シーン：アルフヘイムから旅立つ前夜、オフェリア自宅二階の主人公の部屋、主人公が荷物を整理して、明日のために備えている)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント、夜)

《正面、やや遠い、通常音量》

(ドアの外) あなた？ 着替え終わりましたか？

では、入りますね。

(演出：ドア開け閉め、足音)

《正面、通常距離、通常音量》

荷物、もう準備できたんですね。

(平静を装う) いよいよ、明日ですね……ノエル様は記憶操作の術式を準備しています。
あなたがこの部屋で過ごす夜は、これで最後ですね……

(深呼吸) すーはー

(以下、強引に明るく)

では、明日のために、ここでもう一度、身体の検査を行いますね。

(オフェリア魔法展開)

……はい、終わりました！ もう問題はないと思います。

ご快復、おめでとうございます！

【主人公】 こちらこそ、ありがとうございます！ 僕がこんなにも早く回復できたのは全部オフェリアさんのおかげですよ。

いえいえ、私の治療は、本当に些細なことですから。

くどいかもしませんが、念のため、明日の流れをもう一度説明いたしますね。

記憶操作は、一番安全な眠っている状態で行います。今夜、あなたが眠ったら、私が更に深い睡眠術を施します。

そして明日の朝、ノエル様があなたの記憶を削除し、その直後にあなたをヴァルガード方向へ転送します。

以前にも言った通り、直接ヴァルガードへは転送できませんので、転送先は、あなたが指定していた地点になります。転送されたあと、睡眠術が自動的に解け、あなたは目を覚します。

改めて確認しますけど、転送先に魔獣は少ないとはいえ、本当に大丈夫ですか？道に迷いません？

【主人公】ああ、大丈夫ですよ。何度も訪ねたところなので。

大丈夫、ですか。では明日、ご武運を。

(少しだけ沈黙)

(声は少し暗く) ……あなたは、今夜ここで眠ったら、次に目を覚ますともうアルフヘイムから離れているんですよね。

(声は少し震える)

……もちろん、アルフヘイムに関して全ての記憶はなくなります。

……つまり、私達はここで、お別れ……ですよね。

短い間でしたが、とっても楽しかったですよ、私は。

あなたは、どうですか？

【主人公】……ああ、僕も。

ふふ、そうですか……それなら、良かったです。

(深呼吸) すーはー

(強引に明るく) では、もうそろそろ時間ですし、私はこれで――

【主人公】オフェリア……

(驚く) っ！

(声が震える) あ、あら……あなたからの呼び捨ては初めてですね……なんでしょうか。

【主人公】……話が……ある。

話……ですか。

(演出：オフェリアの足音)

《正面、やや近い、通常音量》

はい、私は、ここにいますよ。

【主人公】……オフェリア、僕は……ずっと、あなたのことを——

(オフェリアから主人公にキス、5秒、激しめ)

《正面、直近距離、小さい声》

これ以上は、なーんにも言わなくていいですよ。

私も……あなたと同じ気持ちですから。

あなたたって、知っているはずですよ？二週間前のあの夜……

だから、言葉より、確実な行動で、私に、示してください……

はい……今回は、あなたの方から……

(キスアドリブ 10秒、激しめ)

こんな時に告白だなんて、あなた、本当にずるい人ですね……

するすぎます……だから、今夜はもう、あなたのそばから離れませんよ？

(ちょっとだけ命令っぽく) はい、もちろん、寝るときも一緒です。お布団にお入りください。

【主人公】……今すぐ？

ええ、今すぐです。

(演出：布団の音)

(正常口調に戻る) では、私も、失礼いたしますね。

よいっしょ……

(演出：布団の音)

《正面、直近距離、小さい声》

……私達にはもう、今夜しかありませんから。

なので、私も、我慢しませんよ……

今までの分、全部、全部、あなたにぶつけますからね？お覚悟はよろしいですか？

(演出：布団のもぞもぞ音)

(主人公に抱きしめられている) んつ、はあ……

私を抱きしめたということは……もう決心したってこと、ですよね……

(これから、段々感情的になって、声も段々震えて) 好き。好きです……あなたが好き……
あなたの手が好き、背中が好き、肌の温度、耳の形……

私のために真剣に悩む時がすき、私を慰める言葉がすき、私を甘やかす時の手つきがすき……

(半泣きの状態で) もしあなたがエルフだったら……あるいは、私が人間だったら……
もし、私達が他の時代に出会えていたら……

ねえ、本当に、このまま本当に……私とここで暮らしませんか……？

(主人公からのキスに遮られた、「お嫁」と言いかける) 私は、喜んであなたのおよ——

(キスアドリブ 10秒、激しめ)

【主人公】 (涙ぐむ) それだけは……それだけは……できません……！

(以下、涙を流しながら)

そうですよね……やっぱりできませんよね……

ごめんなさい……最初から決めていたことなのに……

私達と同じように、あなたも自分の故郷、そして故郷の人たちをずっと、ずっと大事にしているから。だから……たとえ、どのような苦しい選択をしても……

ええ、私は知っています。知っていますよ。

二週間前、敢えて私からのキスに応じなかったのは……自分がすぐにここから離れるから、私を傷つけたくなかったから、でしょう？

ふふ、ずっとあなたを見ていたから……わかりますよ……

だから私も「なかつたことにしよう」と……今夜だって笑顔で、あなたをお見送りしようと……

【主人公】 ……ごめん、こんな感情もコントロールできない、わがままなやつで。

もう、謝らないでください……

だって、気持ちが伝わってきたもの。これさえあれば十分すぎるほど、満たされています……
でも……でもね、やっぱり、あなたとここにいたいって、心のどこかで願ってしまいます……

こちらこそ、こんなわがままな私を、許してください……

(満たされた声で) あっ、こんなにも強く私を抱きしめて……
では、私からも……ぎゅうー

(優しい声で) もう、あなたも、泣いてるではありませんか……
んちゅ……ちゅ……

大丈夫、私は大丈夫だから……あなたの存在は、ずっとわたしのここにありますから……
だからもう、私のために悲しまないで……

もしあなたが私を忘れるのを恐れているなら……
このプリズムを受け取ってください……これさえあれば、きっとまたどこかで会えますから
……

(しばらくの沈黙)

《正面、直近距離、小さい声》

(主人公に酔っているように) あなたは、私の恋人、私の灯火、私の瞳……
だから、目隠しなんてもう要りません。

(演出：目隠しを取る)

例え不気味だとしても、例え忘れても、お願い……今だけは、私の目を見て……

【主人公】 ……綺麗です。綺麗すぎますよ……

……綺麗……ですか……

なら、瞼にキスしてください。髪も耳も触って、甘噛みして……
あなたの唇を感じたい、掌を感じたい、腕も胸も、太ももから足先まですべて……温度も匂い
も、心の音も……

私を包んで……今はただ、あなたに酔っていたいだけですから……

(吐息と甘い反応（うん、あっ、など）混じりの全年齢範囲でギリギリセーフの悩ましい声)

明日の朝が来なければ良いのに……

無限のような、長い、ながーい満月の夜に、あなたと私、二人きりで……
何も気にすることなく、手を重ね、唇を重ね、体を重ね……

もし、そんな魔法があったら……いいえ、そんな夢を見られたら、いいのになあ……

キス、ですか？

はい、どうぞ……いつでもしていいですから、遠慮しないで……

《ささやき》舌を絡めても……いいのですよ？

(キスアドリブ 20秒、やさしめ)

《小さい声》

ふふ、このような長くて優しいキス、私は好きです……

瞼の上にもあなたの温かい感触が残っている……

耳の先に触れられて、くすぐったいような、気持ちいいような刺激があつて……

それに、あなたの懷、ぽかぽかしてて、いい匂い……

もう、私が先に寝ちゃいそうですよ……

ねえ、あなたは、どうですか？その……抱き心地……とか……

ほら、私の体温は低い方ですし……

(少し恥ずかしい) や、柔らかいですか……なら、よかったです……

わ、私……その……胸とお尻は、少し大きい方ですので……

何となく異性からの視線を感じるというか……

もちろんあなたなら、全然大丈夫ですよ……？

治療の時にあなたが私に体を預けたように、今夜私は……すべてをあなたに預けます……

朝日が昇るまで、どんなことをしても、大丈夫ですよ？だから、遠慮しないで……？

【主人公】 さ、流石にここまで無責任なこと……

(ちょっと強気で) 責任なんて今更気にしないでください！

(少し恥ずかしい) 私としては、その……奪われても、いいと、思ってますから……だから

……

もう、どうしてこんなところで優柔不断になるのですか？

私達エルフは長生きですから……べ、別に初めてとかそんなこと気にしていませんよ……

でも……どうせ初めてを経験するのなら、私は、あなたがいい、と思ってますよ……

それとも、私にここまで言わせておいて……ダメなんですか？

(ちょっと誘惑するように) ほら……私が今着ているこのパジャマ、あなたが初めてここに泊まった時に、あなたが着ていたものですよ……？

だから、もう一度……あなたの匂いを頂けませんか？

【主人公】 オフェリア……！！！

ふふ、どうやら、その気になれたみたいですね……
では、よろしく、お願ひしますよ……あなた。

(キスアドリブ、20秒、優しめ、フェードアウト)

○Scene 2：オフェリア自宅・深夜

(シーン：行為が終わって、寝入っている主人公、オフェリアが主人公を抱きしめ、頭を撫でている)

(アンビエント：普通の森小屋のアンビエント、深夜)

(演出：髪を撫でる)

《右、直近距離、小さい声》

(満たされた、優しい声で) ……ありがとう、あなた。私の為にこんなにも頑張って……
好きな人と一緒にいることは、こんなにも満たされるものだと、今日初めて知りました。
今も心地よくて、まるで雲の上を歩いてるみたいですよ？私。
ふわふわして、緩やかで、穏やかで……

(悲しそうに) でもね、実を言うと、私はもう一度あなたと、あの川辺に行きたいです……
治療の為ではなく、ただ二人で一緒に座って、月見をして……
もう一度、あなたとごはんを食べて、「手料理美味しいね」って言われたい。そして、あるときはノエル様も一緒に……晩酌のワインで酔ったノエル様を、二人で慰めたり……ふふ。
もう一度、森の奥に行って、あなたに手を引かれて、「一曲、踊ろうか」って……曲の最中に、「好き」って私の耳元で囁いて……

(静かに、泣きながら) でも、もう叶わないかもしれません。
多分私達は、どれほど近づいても、こうやってすれ違うだけの運命……
でも、こんな素敵な人と出会って、一緒に笑って、お互い恋に落ちて……
これ以上求めるのは、ちょっと欲張りすぎかもしれませんね？ふふ。

《ささやき》

だから、今回で本当に、さよならなんですよ……愛した人よ。

(演出：オフェリア魔法展開、睡眠術を主人公にかける)

○Scene 3：オフェリアのメッセージ (SOS)

(シーン：オフェリアのプリズムに埋め込んだメッセージ)

(アンビエント：なし)

《正面、通常距離、通常音量》

今、この夢を見ているあなたへ。

あなたは一体、どなたなのでしょう。

私にはわかりません。あなたが誰なのかも、どの時代で生きているのかも。

けれどおそらく、あの日事故に巻き込まれてアルフヘイムにやってきた「彼」ではないのでしょうか。

これを聞いているということは、アルフヘイム大結界がなんらかの攻撃を受けて、かなり危険な状態です。下手すれば、結界ごと破壊する可能性があります。

ですが、この時点では私達エルフ一族はまだ存命していて、そして、救われる可能性が十分にあります。

アルフヘイム大結界は莫大な魔力を含んでいます。強力な攻撃を受けた場合、その魔力が放出され、必ずエーテルの異常波動が観測されます。その異常波動の源を辿れば、きっとアルフヘイムが見つかります。

(強くお願い) 誰かに救われた私でも、もし誰かの命を救えるのなら、どうか、どうか、私達を……エルフ達を助けてください。無茶なお願いかもしれません、お願いいたします！

(悲しい) ただ……願わくば、もう一度、彼と会いたかった……

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

自然のご加護があらんことを。

アルフヘイム エルフ族神官 オフェリアより

8、預けたものが

||||登場人物：オフェリア、ノエル、クレア、ブレッタ、主人公

||||トラック内容：アルフヘイムの危機、問題発生から解決、主人公がアルフヘイムに帰還

○Scene 4：ヴァルガード・魔導研究所

(シーン：主人公のオフィスにて、ブレッタが主人公を起こしにくる。記憶が戻った主人公がアルフヘイムに駆けつける)

(アンビエント：普通の部屋アンビエント)

(演出：服のごそごそ音)

【ブレッタ】

《やや左、やや近い、小さい声》

(主人公を揺らす)

……ださい……せ……せんせ……先生、起きてください。

【主人公】 ……？ブレッタか……

《通常距離、通常音量》

はい、ブレッタです。

先生、また水晶を握ったまま寝ていましたよ？

【主人公】 ……水晶……そうだ、水晶はオフェリアの……！

先生、まだ寝ぼけているんですか？私、ブレッタですよ。

それに「オフェリア」ってどなたですか？

(わざと) 私、先生がそんな遊び人じゃないってずっと信じていたんですよ？がっかりしました。

【主人公】 全部、思い出したぞ……

「全部思い出した」って、先生、さっきからなにを仰って——

っ！まさか、事故直後の二ヶ月間の記憶が戻ったんですか！？

【主人公】 ああ、全部この水晶のおかげだ。

(ブレッタ真面目モード)

水晶のおかげ？意味が分かりません。そもそもこれは一体何なんですか？

先生がずっと我が子のように大事にしていたから、測定すらさせてもらえませんでしたし、今になっても成分が解明できていないんですよ？

【主人公】いや、解説しても無駄だ。この水晶はいわゆる「記憶媒体」ってやつだ。

記憶媒体……つまり、レコードみたいなものですか？この石が？
そんな技術、可能なんですか……？

でも今までこの石にはなんの反応も起きましたよね？
あれからもう二年も経ちましたのに、どうして今更……
たとえなんらかのトリガーがあったとしても、それは多分先生ではないですね……

【主人公】……そうだ、夢の最後のメッセージ！ブレッタ、ここ最近のエーテルの異常観測記録は？

えっ？エーテルの異常ですか？もちろんありますよ、もう忘れてしましたですか？
週明けに、今まで観測できた中で一番大きいエーテル波動。研究所でかなり話題になったじゃないですか。

【主人公】……推測した発生源はどこ？

異常の発生源……？
失礼ですが、先生。また無茶なことを考えていませんか？

【主人公】(怒鳴りに近い)いいから教えろ！

(驚く)は、はい！推測した発生源は、ヴァルガード城南西300キロで、丁度、二ヶ月間の記憶の空白後に先生が覚えている最初の地点です。

【主人公】(独り言)まさか、あれが本当にオフェリアの救助信号だとは……ちつ、急がないと……

(演出：足音、早めに)

って、先生、待ってください！一体どこへ！？ま、まさかご自分で調査——

【主人公】「バイク」を借りるぞ！

(慌てて)えっ！？冗談言わないでくださいよ先生！
「バイク」は試作品でかなり危険です！新しいエンジンは全然……

《やや大きい声》って、先生、聞いてますか！先生ー！！！

《通常音量》

行っちゃった……

はあ……あんなに怒鳴られたの、ここに来て初めて……

それに、あそこまで怖い顔した先生は、見たことない……

あの二ヶ月間、一体なにがあったの……？

お願いですから、絶対に生きて帰ってきてくださいよ、先生……

○Scene 5：リヴェンダル・臨時指揮所

(シーン：アルフヘイム臨時指揮所にて、ノエルが万策尽きた時に主人公が帰還、全体的にボイスの音量が大きい)

(アンビエント：忙しい指揮所、背景の雑音や色んな設備の稼働音もあり)

(演出：魔法装置アラーム音)

【オフェリア】

《やや左、通常距離、大きい声》

ノエル様！魔法結界、損耗率80%！

【ノエル】

《やや右、通常距離、大きい声》

ちっ！オフェリア！結界を破棄しろ！奴らに魔法をぶつけるぞ！

【オフェリア】

いけません！全戦力でも私達に勝ち目はありません！

結界を捨てたら本当に終わりですよ！

【ノエル】

《独り言、通常音量》

しかし、衆寡敵せず、打つ手もない……

あの忌々しい鉄塔に直接転移できれば、チャンスがあるというのに……！くそ……！！！

【オフェリア】

……あっ！ちょっと待ってください！こ、これは！

【ノエル】

《大きい声》

どうした！？

【オフェリア】

敵の位相干渉装置……タワー付近に、アルフヘイムの魔法特徴反応があります！

【ノエル】

そんな馬鹿な！エルフは全員結界内にいるぞ！

【オフェリア】

目標、敵の干渉装置に接近中！もう一つ、目標反応があります……！

(嬉しそうに) ま、まさか……本当に……

このエーテルのパートン……間違いありません！彼です！彼ですよ！私が……！私の！！！

【ノエル】

(驚く) なっ！？どうしてあの小僧がここに！？

オフェリア……まさかお前——

【オフェリア】

この件はあとで話します！反撃のチャンスは今しかありません！同じ特徴なら転送もできます！今すぐ出撃の準備をして、一気に敵の干渉装置を破壊しましょう！

【ノエル】

ええい！ままよ！後でじっくりと尋問するぞ！今回妾も直に出撃する！

クレア、今すぐ突撃隊に伝令、出撃を準備しろ！

【クレア】

《正面、通常距離、大きい声》

はっ！

【ノエル】
オフェリア、転送術式頼むぞ！

【オフェリア】
はい！今すぐ！

○Scene 6：アルフヘイム結界外

(シーン：主人公がアルフヘイムに到着、オフェリアから二年ぶりの通信、タワーの破壊作戦)

(アンビエント：平原のアンビエント、昼)

(演出：エーテルバイクのエンジン音、スピードが段々下がる)

(演出：主人公魔法展開、通信が入る)

【オフェリア】(通信)
《正面、通常距離、通常音量》
(気持ちが昂って、声がちょっと震えている)こちら、アルフヘイム臨時指揮所。私、オフェリアです、聞こえていますか？
ふふ、この特製のリンクちゃんを通じて話すのは久しぶりですね、あなた。

【主人公】二年ぶりですよね？待たせてごめんな、オフェリア。

(更に震える)たった二年です。エルフにとってこれくらいの時間は「待たせた」ことにはなりませんよ！

(ほぼ泣いてる状態で)ただ……また会いに来てくれて、本当に良かった……

【主人公】僕もだ……もう二度と、あなたを忘れたくはないよ、オフェリア。

(気持ちが段々落ち着く)でも、本当の再会は、この件が終わったあとにしましょう。

(オフェリアが涙を拭く、泣きやむ)約束ですよ？あなた！

【主人公】ああ！

(しっかりしている声で)まず今は、目の前のことに集中してください。
ここからは、パイロットとしてリンクちゃんを通じてサポートいたします。

まずは状況報告です。結界自体はもう長く持ちません、速やかに敵の干渉装置を破壊する必要があります。

あなたは今、アルフヘイム北30キロのところにいます。多分もう見えてきたと思いますが、あなたが今向かっている先に、タワーがあります。

破壊すべき目標は、そのタワーの中にあります。

もちろん一番手っ取り早い方法は、転移魔法でタワー付近に直接転移し、その塔自体を破壊することです。

しかし、アルフヘイムから距離が遠すぎたので、今まで転移ができませんでした。

でもあなたがあるものを持ってきたことから、可能になりました。

【主人公】もしかしてこの水晶か……

そうです、私のプリズムです。それをビーコンとして使って、今から、ノエル様、クレア様と突撃隊の皆さんがそちらに転移します。

【主人公】えっ！？今ですか！？

はい、今です。具体的な作戦内容は、ノエル様が直々に説明します。

それでは、転移まであと、3、2、1……

【主人公】ちょ、ちょっとま——うおおおー

(演出：転移魔法)

【ノエル】

《やや左、通常距離、通常音量》

久しぶりじゃな、小僧。

【クレア】

《やや右、通常距離、通常音量》

あら、本当に来れたんですね。愛の力ってすごいじゃないですか、ふふ。

【主人公】ノエル様、クレアさん……！お二人ともお久しぶりです。

【オフェリア】(通信)

転移成功です。

では、私は指揮所で待機しますので、なにかあったらすぐ連絡してくださいね。
それでは、あなた、自然のご加護があらん事を。

【ノエル】

オフェリアとのやりとりは終わったか？それじゃ、一連の流れを説明するぞ。
作戦計画自体は簡単じや。

妾が突撃隊を率いて、鉄塔のベースにいる敵の防衛の注意を引く。その隙にクレアがこれらを
塔の足元に設置する。終わったら妾達と合流。

最後に皆が小僧のところに転移したら、妾がトリガーを引く。

だから小僧、お前はここで大人しく待ってろ。お前が妾達の逃げ道なのじや。万が一のため、
突撃隊の一人も残しておくぞ。

【主人公】わ、わかった。でもそれ、一体何なんですか？

ん？これか？ああ、小僧はわからんか。

これは妾特製のエーテル爆弾じや。あの程度の鉄塔、これが四つほどあれば塵になるぞ。

大体わかったな？他の者も、問題あるか？

ないみたいじやな。

クレア、今から今回作戦の為に使う特殊な通信魔法を編成するぞ。
オフェリアの方には妾が知らせる。

【クレア】

わかった。こっちも、タワーまでの転移魔法が準備できたよ。

【ノエル】

ああ、ありがとうな。

小僧、お前もやるのじや。二年ぶりじやが、編成方法は覚えておるか？

まあ、もうオフェリアと繋がっとるし、大丈夫か。

じやが、今回はちょっとした変更があるぞ、よく見ていろ。

(演出：ノエル魔法展開)

さあ、真似しろ。

(演出：主人公魔法展開)

ふむ、本当によい筋じやな。エーテル貯蔵量が少ない人間にはもったいないくらいじや。
今回の件が終わったら、魔法に関してちょっと教えてやってもかまわんぞ。

《独り言》

……これで、通信も問題ないかの。

【オフェリア】 (通信)

《正面、通常距離、通常音量》

はい。問題ありません。

【ノエル】

小僧、とりあえずなにかあつたらすぐに連絡するんじやぞ。

《正面、通常距離、大きい声》

皆の者、これがアルフヘイムを救う最後の戦いじや。目標は、あの塔を地表から消すことじや！

我が一族の為、いくぞ！

(エルフたちが術式で転移され、すぐに、鉄塔から戦いの音が聞こえてくる)

(演出：転移魔法、遠い爆発音、続く)

【オフェリア】 (通信)

ノエル様たち、もう行かれましたね。

【主人公】 僕は待っているだけなんだけどね。

「待っているだけ」なのは、私も同じですよ？

それに、あなたがここにいるおかげで、私達はこの最後のチャンスを掴めたのです。

あなたはもう、「希望」という一番大事なものを、私達にくれました。

(しばらく沈黙)

【主人公】 なあ、オフェリア。最後のあのメッセージは……

やっぱり、プリズムの中の最後のメッセージが気になりますか？

あれは、もし結界になにか起こってしまった時、自動的にその中にいる記憶を、プリズムを持つ人の夢で再生する仕組みなんです。

はい、あなたがアルフヘイムに来てから、離れる時まで全部。そして最後にメッセージを仕込みました、「エルフの私達を救ってください」と。

多分何十年か何百年先で発動されるだろうと想定していましたが、まさかこんなにも早く役立ったとは……

でも、おかげで、あなたがここに来てくれました、ふふ。

(しばらく沈黙)

(ぽつりと) ……私はどうしても、私達の思い出を、そのまま忘れ去られたくはなかったのです。

プリズムをあなたに贈った時は、本当になにも考えていなかった。

たとえプリズムが売り飛ばされ、どこの誰に買われたのかわからなくとも、一人だけでもいいから知っていてほしい。せめて、誰かに、伝えていって欲しい。

私達が、あるゆる壁を超えていたことを。

そんなことを願うばかりだった。

「売るはずがない」、ですか……

ふふ、やっぱり、私の傍には、あなたがいてほしいです。

【クレア】 (通信)

《やや右、通常距離、通常音量》

(からかう) あら～オフェリアちゃん大胆ですね～

【ノエル】 (通信)

《やや左、通常距離、通常音量》

オフェリアと小僧、お前ら作戦用の通信魔法でイチャつくでない！！！鬱陶しいわ！！！

それにクレア、お主も爆弾の設置に専念しろ！

まったく、いくら敵の主力がアルフヘイムにあって作戦が実行しやすいとはいえ、緊張感なすぎるじゃろうがお前ら……

【オフェリア】 (通信)

ごごごめんなさい！私達の間での特製リンクちゃんで通信してると思ってました……

【ノエル】（通信）

はあ……まったく、オフェリア、お主もお主じやぞ。もう小僧にメロメロではないか……

【オフェリア】（通信）

私はことはもういいから！ノエル様も魔法攻撃に集中してください！

通信を切り替えましょう、あなた！

【クレア】（通信）

ちょっと待って、設置はもうすぐ終わるわ。

《独り言》……よし、これで最後だな。

《通常音量》ノエル、今から合流するよ、どこにいる？

【ノエル】（通信）

丁度タワーの正門、氷と炎の融合魔法陣のところじや。

【クレア】（通信）

「融合魔法陣」って……ノエル、力入れすぎじゃない？

【ノエル】（通信）

ほっとけ、妾の結界をあんなボロボロにしおって……こやつらをどう調理するかは妾の自由じやろ？

しかし、妙じやな……

【クレア】（通信）

ええ、確かに、動きがおかしいというか……

【ノエル】（通信）

動きだけじゃないぞ……こやつら、最初からフードを被っておるじゃろ？
フードを剥がしたいんじやが、その前に自然発火するんじや……
命を捨ててでも妾達から顔を隠したいというのか……？

【クレア】（通信）
ますます不気味なやつらね……

【ノエル】（通信）
まあ、どんな奴であれ、妾の魔法で形跡なく消してやるぞ……！

【クレア】（通信）
はいはい、ほどほどにしてね？

【オフェリア】（通信）
……どうやらもうすぐ終わりそうですね。

【主人公】想像よりずっと早い……っていうか「氷と炎の融合」って可能なの？

あっ、「融合魔法」はノエル様の得意技ですよ。氷魔法と炎魔法を同時に使っているんです。正直、私あまりわかりません……普通は同時に使えば相殺するだけですが、ノエル様だけは、単独で使うより攻撃力が絶大です。

【ノエル】（通信）
それはお前の魔法知識がまだまだということじゃぞ、オフェリア。
いつかお前も、この技を受け継ぐのじゃ。

（少し時間経過）

オフェリア、妾はもうクレアと無事合流した。
突撃隊全員も、転送地点に到達したか？

【オフェリア】（通信）
はい、全員無事だそうです！

【ノエル】（通信）

よしつ、それでは小僧、妾達が今から転送するぞ！

【主人公】は、はい！

転送まで、3、2、1……

(演出：転送魔法)

【ノエル】

《正面、通常距離、通常音量》

皆無事帰ったな？

それじゃ、トリガーを引くぞ！

(演出：遠い爆発音、タワーが崩れる音)

オフェリア、起爆成功したぞ！！！塔が崩れてる！！！

結界の状況は！？

【オフェリア】（通信）

ちょっと待ってください！

えっ、な、なにこれ……ありえない……か、干渉装置はまだ稼働しています！

結界は動かないまま、虚空間への変換を行えていません！

【ノエル】

なっ！？あの塔はもう瓦礫になったぞ！その中の干渉装置が無事なはずが……！

【オフェリア】（通信）

とにかくタワーのところに戻って、装置そのものを破壊する必要があります！

【ノエル】

ちっ！肝心のところが不運だったか……

クレア、一緒に来い。お前の得意な風で瓦礫を吹き飛ばす必要があるかもしだ。

【クレア】

ああ、わかったよ。

【ノエル】

突撃隊、ここで暫し待機して休憩する。小僧も一緒じゃ。

(演出：転移魔法の音)

(カット割り：時間経過)

(クレアとノエルが干渉装置を探している、通信魔法を通じて主人公とオフェリアがそのやりとりを聞いている)

【クレア】(通信)

《やや右、通常距離、通常音量》

ノエル、装置を見つけたぞ！

【ノエル】(通信)

《やや左、通常距離、通常音量》

本当か！？

【クレア】(通信)

ああ、でも、自力で破壊できなかつた……

この装置を守ってる魔法結界はどこかおかしい……こんな魔法、見たことない。

【ノエル】(通信)

なんじやと！？

クレア、ちょっと見せてくれ。

(黙り込む)……

【クレア】（通信）

ノエル、どう……？

【オフェリア】（通信）

《正面、通常距離、通常音量》

い、一体どういうことですか？

【ノエル】（通信）

《独り言、通常音量》

（声が震える）わ、わからん……こんなもの……まるで……

これは、妾が知っている術式を編成してできたものではない……

実際に触れるということは、少なくとも、位相を弄ってはいない……でもそれ以外には、なにも……

（焦る）なんじゃこれ……なんじゃこれ！

【オフェリア】（通信）

うそ……ノエル様まで……

【ノエル】（通信）

（深呼吸）ふう一はあ一……

位相を弄っていない以上、結界というものは結局は力勝負……威力さえ出せればどんな結界でも崩れる。

クレア、お主と妾の魔法を合わせてこいつを破壊してみよう。

（厳肅に）もちろん、余すことなく、全力でな。

【クレア】（通信）

ああ。

【ノエル】（通信）

じゃ、準備はいいか？いくぞ！

（演出：魔法の音、爆発音）

【ノエル】（通信）

成功したか！？

（焦る）オフェリア、結界の状況を報告しろ！

【オフェリア】（通信）

……いいえ、結界は今まで通りです……

むしろ、タワーが崩れたせいで、アルフヘイム周辺の敵の攻撃が更に激しくなりました……

今、結界の損耗率は90%に近いです……

ノエル様、私達に残された時間はもう長くはありません……

【ノエル】（通信）

あ、ありえん……妾とクレアの魔法を合わせても、びくともしないなんてこと……

【主人公】じ、じゃあノエル様の爆弾を使えば……

妾もエーテル爆弾を使いたいが、残念ながらもう残っていないのじゃよ、小僧。

アレは一日ほどかけて一つしか作れぬもの……妾達にそんな余裕はない……

【主人公】そんな……ここまで来たのに……

【オフェリア】（通信）

ノエル様、安心してください。私のプリズムがあれば、少なくとも、子供たちをそちらに転移することができます。「エルフ」には、まだ生きる道があります。

安心してください、私は最後までここに——

【主人公】なっ！？

【ノエル】（通信）

《大きい声》

（怒鳴り）

なに馬鹿なことを言っておるのじゃお前は！！！させぬぞ、絶対にさせぬぞオフェリア！！！

お前がこんな素性も知らぬ陰湿な輩のせいで命を落とすなんぞ絶対に許さん！！！

死ぬなら妾が——

【クレア】（通信）

《大きい声》

ノエルもオフェリアも落ち着け！感情的になる前にもう一度現状を整理しろ！

あなたたちの頭ならなんらかの方法を見つけ出せるはずだ！

少しだけとはいえ時間はまだある。ここで諦めるのは早すぎるぞ！

【ノエル】（通信）

《大きい声》

それがわからんからじやよ！！！

傷一つないということは、さっきの十数倍以上の威力を出さないと無駄ってことじやぞ！

爆弾を作るのはもう間に合わんし、例えオフェリアと突撃隊、他の集落のリーダーを全員集めても足りぬくらいじや！

（演出：エーテルバイクのエンジン音）

【オフェリア】（通信）

って、あなた！？今どこに！？

「解決策があります」？ちょ、ちょっと待ってください！

ノエル様、クレア様、彼がタワーの方に行きました！

○Scene 7：タワーの下

（シーン：タワー爆発現場、ノエルとクレアが転移された主人公を見ている。主人公からの提案）

（アンビエント：平原のアンビエント、昼）

（演出：転送魔法、魔法バイクのエンジン音が段々と下がる）

【ノエル】

《正面、通常距離、通常音量》

小僧、解決策があると言つておったが、どういうことじや？

ふざけとるなら、流石の妾でもお主をぶつ飛ばすぞ？

【主人公】この「エーテルバイク」を使います。

「エーテルバイク」……？お前の乗り物か？詳しく説明してくれ。

(カット割り：時間経過、主人公の説明)

(深刻そうに) ……おい小僧、お前本気で言っておるのか？妾からしても、これは無茶すぎる。

下手したらお前が――

【主人公】でも実際にこれより効果のある方法は……

はあ……言つてることはわかる。このままじゃとアルフヘイムは……

しかし、お前が、異種族である妾達の為に、こんな危険を冒すようなことを……

【オフェリア】(通信)

《正面、通常距離、通常音量》

あれ？……もしもし、もしもし？

すみません……皆さん、聞こえますか？

通信状態が悪くて、先程からなにも聞こえてなかつたです……

何かありましたか？

【ノエル】(通信)

小僧の提案に対してやけに口数が少ないとthoughtたら、聞こえてなかつたか……

【オフェリア】(通信)

え？

【ノエル】(通信)

いや、なんでもない……

(少し沈黙)

【オフェリア】(通信)

一体、どういうことですか？

【ノエル】（通信）

（溜め息）はあー、本人はもう決心したから、妾も隠さずに説明するぞ。
小僧からある提案があつてな。

まず、小僧には「エーテルバイク」というものがある。人間が開発した、エーテルを使った乗り物じや。

その乗り物には「じえっとえんじん」とかいう機械があつて、まだ実験段階で不安定だそうじや。

そこで、バイクを装置の真上に転送して、自然の重力とバイク自身の加速を使って、衝突した瞬間に不安定なえんじんを壊し、エーテル貯蔵バンクを起爆するという提案じや。

その貯蔵バンクを満タンにすれば、エーテル爆弾を遙かに上回る威力があるじやろう。
ただし……

【オフェリア】（通信）

ただし？

【ノエル】（通信）

バイクを動かすには、生体媒介が必要なのじや。つまり、「誰か」がその乗り物に乗らなければならぬ……

それに……

【オフェリア】（通信）

（もう話の流れを察して、声が震える）それに……？

【ノエル】（通信）

どうやらあの乗り物には、なんらかのセキュリティーを設置しているようじや。
人間でなければ、動かせぬ……

【オフェリア】（通信）

（声が震える）つ、つまり……彼は、空から落ちて、不安定な爆弾を抱えたまま、本当にギリギリになってから離れなければならない、ということですか……？

【ノエル】 (通信)

(暗く) ……ああ、流れ的には間違いない。

バイクが予定速度に到達したら、小僧がバイクから離れ、妾が事前に設置した空中転送魔法陣に移動する。

転送された位置も空中じゃが、その下ではクレアが待っている。風魔法を使って小僧の落下速度を落とし、着地させる。

妾もクレアも、できるだけ小僧の安全を一番にするが……

この計画の変数はあまりにも多すぎる……

無事に帰れる保証はできぬ……許してくれ、オフェリア……

【オフェリア】 (通信)

(声が震える) なんて、なんてこと……いくらなんでも無茶すぎます！

《大きい声》

一体何を考えているんですか、あなたは！？

【主人公】 ほら、オフェリアは僕の命を救ったじゃないか。これは恩返し——

《大きい声》

「命を救われた」からって、こんな「恩返し」は要らないですよ！

(泣きながら) 約束したじゃないですか！この件が終わったらまた会いましょうって！

攻撃されたのは私達なのに、どうしてそんなことをやらなきやいけないのがあなたなの？

こんな、こんなの……あまりにも……

あなたは高いところが苦手で……ノエル様のお家のエレベーターでも怖いくらいなのに、どうして……

○Scene 8：リヴェンダル・臨時指揮所

(シーン：オフェリアとフローラのやりとり)

(アンビエント：忙しい指揮所、背景の雑音や色んな設備の稼働音もあり)

【オフェリア】

《正面、通常距離、通常音量》

(主人公からの通信を声に出して読む)

「僕はあなたの目ですから。目が見えなくなっても、生きられる。

でも、命を落としたら、目が見えても、なんの意味もありませんから。」

(泣きながら) もう、なにを言ってるのですか……本当にバカな人……

【フローラ】

《後ろ、通常距離、通常音量》

オフェリア先生、ママから聞いたけど、人間のお兄さん、帰ってきたの？

【オフェリア】

えっ！？（慌てて涙を隠す）フローラちゃん、こちらに入ってはいけませんよ？

早く避難所に戻りましょう、お父さんが心配するから。

【フローラ】

《正面、通常距離、通常音量》

私、もう一度、人間のお兄さんと会いたいの。飴を下さったお礼に、お花をあげたいの。

【オフェリア】

ふふ、フローラちゃんは礼儀正しい子ですね。

心配しないで、きっとまた会えますから……

（泣きながら）きっと……

○Scene 9：タワーの下

（シーン：タワー爆発現場、クレアが主人公の作戦提案を準備している、ノエルの昔話）

（アンビエント：平原のアンビエント、昼）

【ノエル】

《正面、通常距離、通常音量》

エーテル貯蔵バンクは充填中、装置の真上に転送する魔法も準備万端……

これで大丈夫かのう……

なあ、小僧。もう一度聞くが……本当にやるのか？

そうか……頑固なところは、オフェリアと同じじゃな、ふふ。

バンクの充填完了までもうちょっと掛かりそうじゃし、少し、昔話をしよう。

オフェリアから聞いたかもしれないが、アルフヘイムは昔、幾度も戦争に巻き込まれて、辛うじてその沼から抜け出した歴史がある。

妾の恩師、ミレイユがエルフ族長を務めた期間にも、我々を籠絡しようとしたやつがおった。とある隣国の使者じゃったかのう……苦肉の策まで使って、「我々を救ってください」だの、「我が国が滅ぼされたら、あいつらの次の目的はアルフヘイムです」だの。

もちろん全部嘘じや。やつらの目的は、魔法戦闘力の高いエルフと同盟を結んだ上で我々の力を使った、ほかの国への「侵略」じゃった。

確かにエルフは国や政治にあまり関心がないが、流石にここまで箱入りじゃない。

ミレイユババアは見事にその計画を見破った。あとは確か、アルフヘイムに兵隊が送り込まれたが、当時の若いクレアと別動隊が頑張って一週間くらいで全滅させたんじや。

このように、我々を騙すようなやつがあまりにも多すぎたのじや……
だから妾も、そんなに容易く異邦人を信じぬ。

(しばらく沈黙)

お前が最初にアルフヘイムに現れた時、妾は怪しいと思った。

結界を張ってから数十年、アルフヘイムに入り込んだ外の者は、お前が初めてじゃった。

お前には申し訳ないが、妾はそのまま、お前が目を覚ます前に追放しようと本気で思っておった。

あの状態のお前にとっては、命の危険に関わることじゃろうがな。

じゃが、オフェリアはどうしても食い下がらなかつた。

お前の命を保証するかわりに、記憶を抹消する。それが彼女の提案じや。

ひねくれものの妾と違つて、オフェリアは根から素直でいい子じや。いい子すぎるくらいじや。

いつか彼女の誠実さを利用しようとするやつがおるじやろうと、妾は思つておつてのう。

じゃから、彼女にお前には近づくなと忠告して、お前を調べてみたのじや。身の回り品と、それから体もな。なにも出なかつた。

もうお前を疑うべきではないと思ったのじやが、お前に關して、妾にはいつも妙に腑に落ちない感覚がある。

今思えば、すべて、今回の事件の前兆だったのかもしれん。

なんでじやろうな、我々エルフにはアルフヘイムという土地と魔法しかないので、平和な生活だけはどうしても、長く続かんのじや。

(しばらく沈黙)

あの二ヶ月間、お前と彼女の距離が段々と縮まっていく過程を見た。

本当のことを言えば、あんな風に輝いておったオフェリアは、妾は見たことがない。
正直、最後にお前の記憶を消す時、まるで妾が悪役のような感覚があった。
せっかく、オフェリアがあんな風に笑ってるのに、よりにもよって自分の手で生木を裂くこと
になるとはのう……
じやが、もう決めたことじやったし、我が一族の運命に関わることなんじや……
そのことも分かってて、オフェリアは妾に涙を見せてはくれなかつたんじやろう。
本当に強くなつたのう……オフェリアよ……

まあ結局、彼女は妾の一歩先に行ったがな、ふふ。
プリズムに記憶を記録して、条件を満たしたら再生……全く、あの娘（むすめ）はいつも意外
性に溢れておるのう。

【クレア】（通信）
《やや右、通常距離、通常音量》

【ノエル】（通信）
《やや左、通常距離、通常音量》
わかった。突撃隊のみんな、ご苦労じやつたな。

【ノエル】
《正面》
ふう……いよいよじやな……
小僧、ここまで来たら、もう妾から言えることは一つだけじや。
無事に帰ってくれ。お願ひじや。
オフェリアの為にも、妾の為にも、エルフの為にも。

【クレア】（通信）
安心して、キャッチなら、自信があるのよ？
絶対、無事にオフェリアの元に戻れるよ！
だから、オフェリアちゃんのかわりに……人間さん、自然のご加護があらんことを。

いってらっしゃい！

（演出：計画の一連の行動を表す長い演出）

【ノエル】（通信）

《やや左、通常距離、大きい声》

小僧、速度はもう十分じゃ！今すぐバイクから離れろ！

クレア、準備はよいか！

【クレア】（通信）

《大きい声》

いつでもいいよ！

【ノエル】（通信）今じゃ！跳べ！

（演出：爆発音）

（演出：風魔法の音、クレアが落下した主人公をキャッチする）

9、渡された黎明

||||登場人物：オフェリア、ノエル、クレア、主人公

||||トラック内容：アルフヘイムの危機が解決して、ノエルが色々と提案

○Scene 10：ノエル自宅

(シーン：勝利のお祝いに、リヴェンダルはお祭りモード。オフェリアと主人公が人の群れを通り抜ける、ノエルの自宅へ)

(演出：遠ざかるガヤガヤの音と祭りBGM、ノエルの魔法エレベーター作動音)

(演出：ドアノック)

【オフェリア】

《正面、通常距離、通常音量》

ノエル様、オフェリアです。

(演出：ノエルがドアを開ける)

【ノエル】

《正面、通常距離、通常音量》

よく来たな、オフェリア、小僧。

外は騒がしいから、まず部屋に入るといい。

(演出：足音、ドア閉め)

(アンビエント：ノエル自宅ラボ)

相変わらず汚い部屋ですまない、適当に座ってくれ。

(演出：三人が座る)

《やや右、通常距離、通常音量》

(ほっとする) ふう……

今回は、流石に危なかった。妾が族長を務めて以来……いや、恐らくクレアとミレイユのときにも、これほどの危機はなかったじゃろ……

当面の問題は解決したが、今回の件、疑点があまりにも多すぎる。

まずはあの塔じや。小僧は知らぬじやろうが、あれは突然に、なんの前触れもなく、まるで一夜で建てられたようじやった。すぐに干渉装置がアルフヘイムの方向に照準し、作動して、結界の位相変換を無効化した。

つまり、敵は作戦の前から我々の隠れ場所を知っておったのじや。

【オフェリア】

《やや左、通常距離、通常音量》

まさか、誰かが私達の位置を漏らしたんですか……？

【ノエル】

それが一番自然な推理じやが、外への魔法通信は不可能な上、情報を渡すのなら結界から出ねばならぬ。どの道、そのような行動をするやつがおったら、お前が感知できるはずじや。

小僧の可能性はひとまず排除できる。いくらお前のプリズムがあるとはいえ、塔はそれが作動する前に現れたのじや。

なにより、プリズムが作動した後に小僧が現れたことが一番の証拠じやろ。

【オフェリア】

じゃあ……やっぱり外から私達を「見つけた」の？

でも、結界が作動した状態で、外からアルフヘイムを探すのはほぼ不可能なはずですよね？

【ノエル】

ああ、間違いない……

じゃが、以上のもろもろの推論は、「結界に問題がない」のが前提じや。

【オフェリア】

……まさか、結界の術式に本当に破綻が？

【ノエル】

完璧な術式などないが、妾の結界もそんなに容易く破れるものではない。

干渉装置のあの訳も分からん結界のことも含めて、確実な答えはないが、少なくとも敵には、妾以上の魔法の使い手がおる……

【オフェリア】

エルフは古来より魔法に優れていて、ノエル様の魔法技術は世界で屈指のはず……
では、魔導科学……でしょうか？
ですが、たった数十年の間にこんなにも早く発展するものでしょうか？

【主人公】いや、その真逆ですよ。全く進展がありませんでした。我々は魔法が使えない種族である上に、魔法そのものの研究が遅すぎる。

【ノエル】

魔導科学研究者の小僧が「全く進展がない」と言うのなら、本当に無理じやろうな。
それに、妾はこの目で小僧のあの「じえっとえんじん」とやらを見たが、あれはエーテルの制御が不安定すぎて使い物にならん。
爆弾としては効果抜群じやが。

【主人公】面白ない……

まあ塔の話はここまでにして。もう一つは、今回の敵そのものじや。
まず、ザコどもの行動がどう考えてもおかしい。
戦いの最中でお前らが聞いていた通り、動きがおかしい上に、自然発火。
オフェリア、お前の報告では、結界の外の敵の群れも、干渉装置を破壊したと同時にすべて燃えたんじやったな？
こんな捨て駒のような使い方……あのフードの下は、恐らく命あるものではない……

【オフェリア】

でも、敵は基礎的な魔法は使えると突撃隊の皆さんから聞きました。
エーテルを使うことができるのは、生体のみに限られていたはずじや……

【ノエル】

ああ、じゃから余計に怪しい。
そして今回は、最初から最後までザコだらけで、リーダーらしいものは見かけていない。
遠距離で指示をしているように見えたが……敵も塔も消滅した今、探すのは難しいじやろ……

【オフェリア】

つくづくわからないですね……

【ノエル】

……ああ、厄介なやつらに狙われたぞ、我々は。

とりあえず、まとめようか。

先日のことで、我々は二つの過ちを犯した。その一、防御術式は想定より弱いということ。これは編成者である妾の責任じや。

既に結界の防御術式を強化し、たとえ敵が再び攻めてきたとしても、アルフヘイムに当面危機はないはずじや。

その二、敵が事前にアルフヘイムの位置を把握していたこと。どのような手段を使ったのかはまだわからぬが、とりあえず、位相変換の術式を完全に再築しない以上、この結界はもう敵からアルフヘイムを匿うことはできん。

こんな得体の知れない敵と出会ってしまったのじや。正直なところ、もうアルフヘイムを閉鎖しても意味がないと妾は思っておる。

よって、アルフヘイムは世界に復帰する。しかし、妾達の力はまだ小さい。再び戦争に巻き込まれる可能性は排除できん。

しかし幸いなことに、あの戦場で、妾は一つの可能性を見つけた。

(主人公に向かって)

《正面、通常距離、通常音量》

小僧。

お前は許可なしにアルフヘイムに入って、許可なしにオフェリアと仲良くなつて、許可なしにアルフヘイム随一のエルフの心まで虜にして、顔に似合わず隨分と大食いじやな？

しかし、お前が我々を探しに来てくれたからこそ、妾達に危機を打破する転機を与えてくれたのじや。

そのことについて、妾はエルフ一族の長として、きちんと礼を言うべきじや。

ありがとう。

お前が妾と共に戦場をくぐったのは事実じやし、更に元々お前はオフェリアからの信頼を得ている。これ以上お前を疑うのは流石に度を超えておる……が、あの戦いは、お前が奴らと手を組んで、エルフの信頼を得るために編み出した芝居という可能性も……

【オフェリア】

ノエル様！いくらなんでも——

【ノエル】

そんな顔をするでない、冗談じや冗談。

こんなでかいスケールで、かつ同時に極めて精密な芝居は、妾が知ってる魔法じや無理じや。

奴らにこれくらいの技術があるというのなら、結界はもうとっくに破られたはず。

妾は疑心暗鬼で、性格が悪くて、とても賢君とは言えぬが、魔法だけには自信がある。まあ、一応族長じやし、見くびってもらつては困る。

で、せっかく異種族に信頼出来る者がおるんじや。早速じやがここでお前に一つ頼みがある。

人間の王に、「アルフヘイムとヴァルガードの間で交流を深めたい」と伝えたい。

お前ら人間の技術と妾達エルフの魔法。上手く組み合わせればどれほどの威力があるか、その身で体験したお前が一番知っているはずじや。

順調にいけば、アルフヘイムもヴァルガードも、今の圧制されているこの状況から抜け出せるかもしだれん。魔導科学を研究するお前の言葉になら、重みがあるはずじや。

もしかしたら、これが人間とエルフ両種族の運命を変えるきっかけになるかもしだれん。

お前は、その運命の導き手となるのじや。

妾はどの様なことでも容易く頭を下げない主義じやが、このことについては、
(頭を下げる演技をお願いいたします) 頼むぞ！

【主人公】ノエル様……信じてくれてありがとうございます！できるだけのことはやります！

ああ、いい報告を期待しておるぞ。

(オフェリアに向かって)

《やや右、通常距離、通常音量》

そして、オフェリア。

【オフェリア】

は、はい！

【ノエル】

(ため息) はあ……結果としては良かったが、お前は妾の命令に背いた。

そやつのアルフヘイムに関する記憶は、全部なかったことにするはずじやった。

よって、お前は今日から、わが一族の神官ではなくなつた。

それと同時に、「アルフヘイムの目」という役割も終わりにする。
暫しの間、妾が直々に結界を管理する。不満はあるか？

【オフェリア】
ありません……

【ノエル】
うむ。目隠しの結界監視機能はもう無効にした。
目隠しそのものは、もうお前の一部になったのじゃろ、もっていけ。

(少し間を空ける)

じゃがオフェリア、お前には、結界の管理ではなく、もっと大事な役目がある。

【オフェリア】
え？

【ノエル】
(主人公に向かって)
《正面》
小僧。「交流を深めたい」と言うからには、それなりの誠意が必要じゃろ？

【主人公】えっ？いや——

(リンクちゃんを通じて) ちっ、空気読むのじゃ小僧、さっさと「はい」と答えろ！

【主人公】あ、ああ、そうですね！

丁度いい、ここについさっきクビにされた元神官がおってな。オフェリアの魔法能力は、お前も知ってるじゃろ？彼女の頭なら、魔導研究にもきっと役に立つ。

【主人公】まさか……

まあ、具体的に言えば……
そう、嫁にしてみたらどうじゃ？

【オフェリア】

えっ……！？ ちょ、 ちょっとノエル様……！？

【ノエル】

《やや右、通常距離、通常音量》

なんじゃお前のその反応、せっかく妾がいいことを言い出したのじゃぞ?

それともなにか？恋人同士ではないのか？もうあれこれやったじゃろ？

【主人公】えっ！？どどどどどうして……

【オフェリア】

わわわ、私はなにも言ってませんよあなた！信じてくださいね！？

【ノエル】

オフェリアあのなあ……あの朝、お前の歩き方がおかしかった時点でもうバレバレじゃよ……
妾の目を欺くなんて百年早いわっ！

【オフェリア】

~~~~~ ! ! !

【ノエル】

で、結婚の件はどうする？

## 【オフェリア】

い、いい、いきなり結婚って言われるとちょ、ちょっと、心の準備が……！

【ノエル】

はあ……オフェリア……もじもじしとると、遠慮なく妾が小僧をもらう——

【主人公】えつ……

**【オフェリア】**

ダメですっ！！！幾らノエル族長とはいえ、命に代えてもここは譲りません！！！

(演出：オフェリア魔法展開)

**【ノエル】**

ちょっ、お主、落ち着け！　ここで魔法展開はなかろう！

妾の家ごとぶつ飛ばしたいのか！？冗談じや冗談！

本当に天性の神官じやなお前は。こんな冗談も通じぬのか！

(主人公に向かって)

《正面》

で？彼さんはこんな態度じやが、お前はどうじや？

うちのオフェリアは、目が見えんのは仕方ないが、顔は整っておるし、いい体しとるし、なにより怒るとめっちゃくちや可愛いからのうー……ちょっと危なつかしいが。

ほら、今でもプリプリ怒つとるぞ。プリプリと。

**【オフェリア】**

(怒る) 一体誰のせいで怒っているんでしょうか？

**【ノエル】**

《やや右》

(棒読み) おお、怖い怖い。

**【オフェリア】**

もう、ノエル様なんて知りません！

(主人公に向かって)

《正面》

(デレデレ) あ、あのー……あなた。今更ですが、私なんかでいいのですか……？

私、目が見えないから、本当にあなたの支えになれるかはちょっと不安ですけど……

でも、出来るかぎり、いいお嫁さんになりたいです！

そ、それとお……あ、あなたさえ良ければ、その一

子供は2、3人くらい欲しいなあーなんて……えへへー

私達エルフは受精率が低いから、あなたにはちょっと負担が掛かりますけど……  
ああーごめんなさい、私ったらなにを言ってるのかしら……気が早すぎですね……

【主人公】……僕は、オフェリアを世界一幸せなお嫁さんにするから！

世界一、幸せなお嫁さんにするって……  
も、もう……本当、嬉しいことしか言いませんねあなたは！  
なら、私も、あなたを世界で一番幸せな旦那さんにする！  
魔法も、研究の仕事も、家事も、子供のことも……何もかも頑張りますから！  
末永くよろしくお願い致しますね、旦那様！

【ノエル】

(気まずそうに) こほん……お前らな……一応、妾はまだここにおるんじやぞ……

まあ、こうなつたら話が早い、妾も早く孫の顔を見たいからの。  
善は急げじや、今夜オフェリアの家の付近に結界を張ろう。誰も近寄ることはできぬぞ、安心しろ。

【オフェリア】

《やや左》  
ちょ、ちょっと——

【ノエル】

(オフェリアの話を遮る) それにオフェリア、人間の精の生命力は強いんじやぞ。  
しかも小僧は魔法も使えるかなりのレアケースじやし、これほど優秀な遺伝子バンクを独り占めしておいて、子供2、3人じやと？  
足りぬぞまったく！子供はアルフヘイム総力を上げて育てるから、ぱりぱりと産めよぱりぱりと！アルフヘイム繁栄の為に頑張るのじや！  
そもそもお前は安産型じやしその豊かな尻でそれくらいは——

【オフェリア】

(恥ずかしい) ノエル様あああ……！！！

(演出：オフェリア魔法展開)

**【ノエル】**

じゃから術式展開はやめろって言ったじゃろうが！  
ああわかったわかった、妾の負け！戯言はここまでじや！

**【オフェリア】**

もういいです、私、お先に帰ります！

(演出：ドスドスという足音、ドア開け閉め)

**【ノエル】**

《正面、通常距離、通常音量》  
まったく……妾は一生、あの娘には敵わぬかもしれんな……  
ふふ、これも、妾が育て方を間違えたせいか……

どちらにせよ、小僧。  
オフェリアは妾の弟子じやが、本当の娘同然じや。  
こんな親バカを許してくれ。

彼女は長い間、アルフヘイムの為に色々と頑張ってきた。  
次は、彼女を世界中連れ回して、広い景色を見せてやる番じや。  
これは妾よりお前の方が、いや、多分もうお前にしかできないことじゃろうな……

彼女を幸せにしてくれ。  
これは、エルフの族長としてではなく、妾個人からの願いじや。  
よろしく頼むぞ、「オフェリアの目」よ。

**【主人公】ノエル様……ありがとうございます……**

なーに、お主に礼を言われるほどのことではない。お前を頼りにしているだけじや。  
ババアの話は終わった。急いで帰れよ、嫁さんが家でお主を待ってるからな。

**【主人公】はい！ありがとうございます！！！**

(演出：足音、ドア開け閉め)

……静かになったのう……

(ちょっと沈黙)

はあー、クレアの言う通りじや。オフェリアに先を越されるのは、やっぱりちょっと複雑かのう……

妾もそろそろ——

【クレア】

《やや右、通常距離、通常音量》

やっぱり寂しがってるじyan~

(ここからノエルがクレアに激しくからかわれます、反応を激しめにお願いいたします)

【ノエル】

《やや左、通常距離、大きい声》

(悲鳴) うぎやあああー！

く、クレアでめえー！！！こういう脅かしはやめろと言ったじゃろうが！！！

っていうか一体いつからいたのじや！？

【クレア】

いやー、ずっとドアの外にいたわよ？さっきオフェリアちゃんが出ていった時、こっそりお邪魔したの～

【ノエル】

いたのならちゃんとと言え！心臓に悪いわまったく！

【クレア】

心臓に悪いって大袈裟すぎない？

もう百年以上付き合ってるんだから、そろそろ慣れてきただろう？

【ノエル】

慣れるわけないじやろ、アホか！

**【クレア】**

しかし、ノエルの悲鳴は本当に聞き飽きないねー  
(わざと) だって、いつもかっこ良くて理性的で冷静な発明家様が、こんな可憐な乙女のよう  
な悲鳴を上げるなんてねー

**【ノエル】**

クーレーアアアアー！！！お前というやつは！！！  
覚えてろよ！いつか仕返ししてやるぞ！！！

**【クレア】**

はいはい、仕返しお待ちしております～

**【ノエル】**

《やや左、通常距離、通常音量》  
(正常口調に戻る) まったく、腹立つやつじや。  
で? 一体なんの用じや? ドッキリしに来ただけじゃないんじやろう?

**【クレア】**

あら、冷たいことを。  
もちろん、オフェリアに追い越されたあなたを慰めに来たに決まってるでしょう?  
大好きなフルーツワインも持ってきたけど、どう?

**【ノエル】**

(酒の面子を立てて) ……ちっ、「どう」って、それを出した時点でもう決まっておるんじや  
ろ。

つまみを持ってくる。代わりに、今日はとことん付き合わせるぞ。覚悟しろ!

**【クレア】**

はいはい、族長の仰せのままに。

○Scene 11：オフェリア自宅

(シーン：オフェリア自宅二階の部屋、二人がイチャつく)

(アンビエント：普通の森小屋、午後)

(演出：ドア開け閉め)

**【オフェリア】**

《正面、通常距離、通常音量》

あっ、おかえり、あなた！

(演出：抱きしめる)

《正面、直近距離、通常音量》

(主人公からの突然の抱擁とキスに驚いている) わっ！あっ……！

(演出：キスアドリブ10秒、激しめ、ねつとり)

《小さい声》

あっ、あなた、少しま、待ってください。

えっと、今はまだ昼間で……

**【主人公】嫌いか？**

いいえ、嫌ではありませんけど……

た、確かに私の家は集落の外にありますが、ほら、ま、前の時は私……かなり大きい声を出してしまったので……

も、もし誰かがここを通ったら……恥ずかしいというか……

《右、直近距離、ささやき》

あんな声は、あなたにだけ聞かせたいです……

《正面、直近距離、小さい声》

だから、夜になってから、ね？お願い、あなた……

今は——

(演出：キスアドリブ10秒、優しめ)

(演出：服のごそごそ音)

(ぎゅーは長め) これと、私のぎゅうーで、我慢してください……

【主人公】いや、僕こそちょっと興奮しすぎて、すみません……

ふふ、大丈夫ですよ。私だって……もうあなたから離れたくはありませんから……  
今日は色々と疲れたでしょう？部屋で一緒に、休みましょうか？

(カット割り：シーン変更)

(演出：ドア開け閉め)

《正面、通常距離、通常音量》

この部屋、あなたが去って行ったあとも、きちんと毎日掃除していたんですよ……？  
心のどこかで、あなたは必ず戻ってくるって信じていたからでしょうか。

とりあえず、ベッドに横になりましょうか？

太陽の温かい光を浴びて、話をしているうちに眠りに落ちるって、素敵だと思いませんか？

(優しい声で) もちろん私は、ずっとあなたの傍に。

《正面、やや近い、小さい声》

贅沢、ですか？

ふふ、今日くらいは、多少贅沢しても、誰にも責められませんよ。

(演出：ベッドの音)

よい、っしょ～

《正面、直近距離、小さい声》

お疲れ様です、アルフヘイムの救世主さん。

【主人公】いや……救世主は流石に大袈裟すぎでは……

いいえ、大袈裟なんかじゃありませんよ？あなたがいなければ、私達は今頃、路頭に迷っているところでした。

でも、あんな危険なこと、もう二度としないでくださいね？私は心配で心配で……  
もしあなたが帰らない人になつたら……私……

あっ……

(演出：キスアドリブ5秒、優しめ)

【主人公】もう心配させないから、約束する。

ふふ、そうですね……あなたはちゃんとここにいるから、そんなことを想像するのはやめましょう。

あっ、そうでした。フローラちゃんのお礼、受け取りました？

【主人公】ああ、この花束ですね？

ふふ、可愛いですよね、この花束。あの娘の大好きな花なので、大事にしてくださいね。

よく考えたら、本当に不思議な出来事でした。

結界を建てた時は、もう二度とアルフヘイムの外へは行かないんだろうと思ってました。  
でも今、私はあなたのお嫁さんで、アルフヘイムが積極的に他の種族と関わろうとしている。  
これも全部、私が、実験のせいでここに現れたあなたを救ったから……  
これから先は、一体どうなるのでしょうか？怖くもありますけど、ちょっとワクワクします  
ね、ふふ。  
ですが今、このひと時は、ひとまず休憩しましょうか。

(長めの沈黙)

ねえ、私の耳を……触って？あなたの感触を刻み込んでほしいです。

(演出：耳を触る)

はい、そうです……この温かい、私を包み込むような感触。  
この記憶さえあれば、たとえいつか来る終わりの日が私たちを引き裂くときが来ても、私はもう二度と、あなたを失うことはありませんから。  
ずっと、私のここにいますから。

愛していますよ、あなた。（キス）ちゅ。

エピローグ：

## 10、プリズム

||||登場人物：オフェリア、ブレッタ、主人公

||||トラック内容：オフェリアとブレッタの世間話、オフェリアのメガネ

○Scene 1：ヴァルガード・魔導研究所

(シーン：魔導研究所、中庭、オフェリアが散歩している)

(アンビエント：普通の静かなところのアンビエント)

(ブレッタがオフェリアに懐いてる感じでお願いいたします)

【ブレッタ】

《やや右、やや遠い、大きい声》

オフェリアさん！

(演出：足音)

《やや左、通常距離、通常音量》

ここにいたんですね、探しましたよ。

【オフェリア】

《やや左、通常距離、通常音量》

あっ、ブレッタちゃんこんにちは！

ごめんなさい、ちょっと散歩してたんです。なにかありましたか？

【ブレッタ】

先生からちょっとお見せしたいものがあると伝えにきました。

一緒に研究室に戻りましょう？

【オフェリア】

あら、それは楽しみですね。ではご一緒します。

(演出：二人の足音)

【ブレッタ】

オフェリアさんと先生、本当に仲がいいですよね。  
ここまで仲睦まじい夫婦、うちの研究所にはそうそういませんよ。

もともと研究者ってちょっと気難しい人が多いので……  
その上、種族の違いもありますし……本当に凄いと思います！

【オフェリア】

ふふ、ありがとうございます。  
私としては、種族の違いがあるからこそ、より相手を大事にできるんじゃないかなって思います。  
でも、私達だって、喧嘩くらいしますよ。

【ブレッタ】

先生とオフェリアさんが喧嘩……？  
想像できません……

【オフェリア】

晩御飯のメニューとかについてよく喧嘩していますよ？

【ブレッタ】

えっと……先生とオフェリアさんの場合は、ただ熱いカップルにしか見えないかもです……  
はあ……ですがあの先生がこんな美人な奥さんを連れてくるなんて……本当にびっくりしました……  
先生は研究熱心で、恋愛や結婚とはかなり遠い印象でしたから。

【オフェリア】

あら、そうですか？アルフヘイムに居た時は、かなり家庭的でしたけど。

【ブレッタ】

それは先生がオフェリアさんにべた惚れしていたからじゃないですか？  
先生の私生活は、助手である私もほとんど知りませんでした。

**【オフェリア】**

あっ、ブレッタちゃんもしかして――

**【ブレッタ】**

いえいえ、オフェリアさんが思ってるような気持ちはありませんから。

私、先生と同じ修道院の孤児でしたので、先生はある意味私の先輩なんですよ、ふふ。

先生が幸せな生活を送れるのなら、私も嬉しいです。

(演出：足音)

(主人公が二人に近づく)

**【ブレッタ】**

あれ？先生、どうしてここに居るんですか？研究室にいたはずでは？

**【主人公】**待ち切れなかったよ。っていうかブレッタ、また僕の悪口言ってたね？信じちゃいけないよオフェリア。

あら、私が先生の悪口だなんて、そんなこと言うはずないじゃありませんか。

ほら、奥さんお連れしましたよ。

**【主人公】**ありがとう。でも本当に？悪口言ってない？

**【オフェリア】**

ふふ、本当に言ってませんよ。ブレッタちゃん、あなたを尊敬してるって。

**【主人公】**毎日のように悪口言ってるのに？

**【ブレッタ】**

オフェリアさん、「毎日のように悪口言ってる」ですって！

これは流石にツンデレの私でも傷つきますよ、先生。

**【主人公】**はいはい。ごめんね。

**【ブレッタ】**

ふふ、先生からの謝罪、ありがたく頂きます。

**【オフェリア】**

《正面、通常距離、通常音量》

それにもあなた、私に見せたいものって一体なんですか？

**【主人公】** ああ、そうだ。やっと完成したよ、これが！

これは……メガネ、ですか？

**【主人公】** ああ。でも、普通のメガネじゃないよ？ほら、試してみて？

え？試すって、私がですか？私では意味がないのでは……？

**【主人公】** それはどうかな。とりあえず試してみて？

じゃあ、試してみますね。

(オフェリアがメガネをかける)

っ！！！あ、あなた、まさかこれは……！！！

(感極まって) あ、あああー！！！